

平成 29 年度メディア芸術連携促進事業 連携共同事業

国内外の機関連携によるマンガ雑誌・単行本等資料
の連携型アーカイブの構築と人材育成環境の整備
に向けた準備事業 実施報告書

学校法人 明治大学

平成 30 年 2 月

目次

第1章 事業概要	3
1.1 今年度事業の目的	3
1.2 実施概要	3
1.3 成果	4
1.4 今後の課題と展望	4
第2章 事業の背景とその目的	5
2.1 事業背景	5
2.2 事業目的	5
第3章 実施体制	7
3.1 実施体制	7
第4章 実施スケジュール	8
4.1 事業スケジュール	8
4.2 実施会議・シンポジウムスケジュール	10
第5章 実施内容	12
5.1 実施内容とその目的	12
5.2 実施内容詳細	12
5.2.1 連携型アーカイブ構築と人材育成	12
5.2.2 シンポジウムの開催	14
第6章 成果と課題	23
6.1 成果	23
6.1.1 明治大学の成果物	23
6.1.2 NPO 法人熊本マンガミュージアムプロジェクトの成果物	23
6.1.3 北京大学の成果物	23
6.1.4 南米連携機関の成果物	23
6.2 課題	23

目次

6.2.1 事業全体の課題	23
6.2.2 明治大学の課題	24
6.2.3 NPO 法人熊本マンガミュージアムプロジェクトの課題	24
6.2.4 北京大学の課題	25
6.2.5 南米連携機関の課題	26
第7章 総括	27
付録	29
2017年11月23日（木／祝）シンポジウムの広報物・新聞記事など	29
各会議の議事録.....	32
目録整備仕様	46

第1章 事業概要

第1章 事業概要

1.1 今年度事業の目的

2015年度・2016年度（以下「過年度」）に京都精華大学が主体となって実施した「施設連携によるマンガ雑誌・単行本の共同保管と人材育成環境の整備」で得られた経験・知見を引き継ぎ、明治大学にて海外機関との連携を踏まえた展開を行う。

具体的な実施目的については、以下の3点となる。

- ① マンガ資料（単行本）の連携型アーカイブの構築
- ② マンガ資料の国内アーカイブ普及に向けた取組
- ③ マンガ単行本の取扱いに習熟した国内外における人材の育成

1.2 実施概要

1.1の目的の①～③に沿って、下記事業を実施

- ・ 明治大学が所蔵している未整理資料約20,000点を利用した連携型アーカイブの構築及び、人材育成事業（目的①と③）

施設名	資料形態	事業概要	成果予定						
			出庫(搬出)	入庫(搬入)	複本抽出	複本出庫(搬出)	複本入庫(搬入)	正本登録(最大値)	資料返送(正本・登録外)
			冊数	冊数	冊数	冊数	冊数	登録点数	冊数
明治大学	単行本	未整理資料の出庫	20,000	-	-	-	-	-	-
熊本マンガミュージアムプロジェクト (森野共同倉庫)	単行本	未整理資料の入庫	-	20,000	-	-	-	-	-
		正本/複本の仕分	-	-	5,250	-	-	-	-
		正本登録	-	-	-	-	-	14,750	-
		複本移送(→中国)	-	-	-	1000	-	-	-
		複本移送(→南米)	-	-	-	4250	-	-	-
		資料返送(正本・登録外)	-	-	-	-	-	-	14,750
中国(北京大学)	単行本	移送資料の受入(1,000)	-	-	-	-	1000	-	-
南米(ブラジル・コロンビアの各関係機関)	単行本	移送資料の受入(4,250)	-	-	-	-	4250	-	-
事業処理数			20,000						

- ・ 連携型アーカイブを構築するための理念共有を行う公開型シンポジウムの実施（目的②）
2017年11月23日（木/祝）に明治大学にて一般公開型のシンポジウム「マンガ文化の保存拠点」を開催し、本事業の主旨・理念・目的を連携先団体のみならず、広く一般と共有する。

第1章 事業概要

1.3 成果

- ① 明治大学の所蔵目録データ及び、文化庁メディア芸術データベース登録用の書誌・所蔵データ
(17,540点)
- ② 海外連携先への寄贈資料
合計移送数=4,513冊
 - ・中国
北京大学= 1,059冊
 - ・南米
 - ・ブラジル
ブラジル文化福祉協会=1,000冊
日伯文化連盟=501冊
サンパウロ州教育局=先方事情により移送せず
サンパウロ大学 日本文化研究所=1,000冊
アルマンド・アルバレス・ペンチアード大学=501冊
リオブランコ大学=202冊
 - ・コロンビア
エアフィット大学=250冊
- ③ 明治大学米沢嘉博記念図書館の所蔵目録データ作成に関する仕様書（マニュアル）
- ④ 公開型シンポジウム「マンガ文化の保存拠点計画」を開催したことにより、改めて「連携型アーカイブ」の必要性とその課題を当事者同士で共有し、また、合わせて社会的な認知・共有を図ることができた。

1.4 今後の課題と展望

- ① 今回は、特定の館の「所蔵目録データ」を作成するという試みを行った。当初は、過年度から行っていた「メディア芸術データベース」のデータを下敷きにしてデータを作成することを想定していたが、その所蔵館独自の「ローカルルール」と、メディア芸術データベースとの間にデータの作りの違いが生じており、その点で過年度以前のデータ登録作業と難度の差が生じていた。今後も継続して同様の試みを進めていくに当たっては、メディア芸術データベースの活用が最も有効と考えるため、メディア芸術データベースを参加館や、今後参加する館でどのように活用していくかを考えることが必要となる。
- ② 熊本共同倉庫の収容量に限界が来ており、今後の継続を考えた場合に、「資料のアウトプット」を進めていく必要がある。
- ③ 本事業では、海外との連携を想定し、合計 4,513冊を中国・南米に移送したが、事業期間・移送便の関係で先方への到達が遅れ、海外連携先における具体的な資料保存・整理・利用の仕方に関する「人材育成」の部分が途中過程となっている。今後、連携関係を継続する上で、海外への人材育成に関して、先方の事情等を含めた上で再検討・継続することが期待される。

第2章 事業の背景とその目的

2.1 事業背景

ポピュラーカルチャー文化（大量複製文化）において、重要な位置を占めるマンガ資料は、「雑誌・単行本（＝大量印刷物）」と「原画（＝原稿）」という主に2つの資料群から構成されており、2つの大きな問題を抱えている。

1. 日本国内のマンガ保存施設での経済的・環境的・人力的な資源不足

日本国内のマンガ保存施設の多くは、「マンガ雑誌」「単行本」を対象として収蔵・展示を行う運営形式を取っているが、多くの施設が資源（収蔵場所・運営資金・専門的な知見を持つ人材など）の不足という課題を慢性的に抱えている。特に、マンガ関連資料を扱う専門人員が不足しており、人材の継続的な育成が課題となっている。

2. マンガ資料の流出

マンガ文化を支えてきたマンガ家の逝去や出版不況の影響で、マンガの原画が廃棄・紛失するなど、従来の「原画」の保存基盤が崩壊しつつある。また、国内での価値付けがなされていない状況下で、海外の収集家による蒐集（しゅうしゅう）対象となり、かつての浮世絵と同じように「四散流出」してしまう可能性が高くなっている。

2.2 事業目的

2.1 で述べた背景（問題点）を解消するためには、「原画」の価値付け作業を行う必要があるが、この作業は、大量複製文化における資料という位置付けを軸に検討されることで初めて可能になるのであり、「原画」が掲載された「マンガ雑誌・単行本」を参照しながら価値付けの検討を進めることが肝要となってくる。

明治大学は、前述した背景を踏まえて京都精華大学が過年度に行ってきた「施設連携によるマンガ雑誌・単行本の共同保管と人材育成環境の整備」で得られた知見を引き継ぎつつ、アーカイブの連携先を国内のみならず、海外に広げて展開すること、また、その過程でマンガを扱う専門人員の育成を試みる場として、「国内外の機関連携によるマンガ雑誌・単行本等資料の連携型アーカイブの構築と人材育成環境の整備に向けた準備事業」を遂行するものである。

第1章にて触れたとおり、明治大学が本事業で目的とするものは、以下の3つである。

① マンガ・史資料（単行本）の連携型アーカイブの構築

今後も継続的に作品が産出されると見込まれるメディア芸術分野において、網羅性の高いアーカイブの構築と次代への継承を目指すとき、それらを単一の施設で完結させることは、下記2点の懸念・危険性をはらんでいる。

- ・収蔵スペースの有限性（寄贈等による重複本の保管などで、スペースが圧迫される）
- ・災害や事故による損失（一極に集中させればさせるほど、損失した際のリスクが高くなる）

第2章 事業の背景とその目的

複数の機関が連携してアーカイブを構築することは、上記の危険性を解消する一助となる。また、寄贈等にて受け入れた未整理の資料群の中から、重複するものを効率よく選別し、それらを必要とする国内外の他機関に分配する体制を構築することは、単一施設でアーカイブの収集・構築を行うよりも総体的に網羅性が高く、かつ災害等に対するセキュリティの高いアーカイブ構築につながる。

本事業は、この網羅性・セキュリティ、そして他地域にわたることで資料へのアクセスがより容易になる「連携型アーカイブ構築」を目指すものである。

また、過年度より京都精華大学が主体となり実施した「施設連携によるマンガ雑誌・単行本の共同保管と人材育成の整備」にて、今後の共同倉庫の在り方として、個人や施設が持て余しているマンガ本を集め、再寄贈することで活用を目指す「マンガプール」の可能性が示唆された。

この可能性を実証するために「マンガプールの出庫実験」を実施する。具体的には、熊本共同倉庫に明治大学の未整理資料を出庫し、正本・複本に分類したのち、複本を連携先（海外）へ移送・寄贈することで、その可能性を検証する。また、移送先を海外にすることで、より広い連携体制を構築することが可能となり、なおかつ日本の優れたメディア芸術を海外に紹介・普及させる一助となると考える。

② マンガ・史資料（雑誌・単行本）の国内アーカイブ普及に向けた取組

過年度 2 年にわたり実施された「施設連携によるマンガ雑誌・単行本の共同保管事業」にて培った国内アーカイブ拠点整備を継承することを目的に、各連携先団体とのシンポジウムを開催する。

アーカイブの維持には、その理念や意義に対する幅広い理解と支持が必要と考え、一般聴衆に向けた内容にて、オープンなシンポジウムを企画・開催する。

③ マンガ「雑誌・単行本」の取扱いに習熟した国内外における人材の育成

1. 「雑誌・単行本」の整理・目録整備に関する、各種作業マニュアルの作成及び公開
2. 過年度事業の成果より、更なる習熟度向上に向けた人材育成への取組を行う
3. 海外連携先への「雑誌・単行本」の取扱い・保存についての OJT を行う

本事業に参加して協働する組織は「明治大学米沢嘉博記念図書館（推定蔵書数 14 万冊）」と NPO 法人熊本マンガミュージアムプロジェクト、また、明治大学から継続的にマンガ資料を寄贈し、連携している中国の北京大学と南米の関連機関（ブラジル 6 機関/コロンビア 1 機関）である。

第3章 実施体制

第3章 実施体制

本事業では、主に明治大学と NPO 法人熊本マンガミュージアムプロジェクトが連携して事業を進めていくほか、「連携型アーカイブ」の海外での構築の第1歩として、北京大学及び南米の関係機関との連携方法の模索を図る。

3.1 実施体制

団体名・総称	取組内容
学校法人明治大学	1) 連携型アーカイブの構築事業・人材育成事業 ・未整理資料の移送（目標値=20,000冊/実数=20,163冊） ・熊本共同倉庫での目録整備事業の進捗管理及び人材教育 ・米沢嘉博記念図書館の目録ルールの共有（仕様書の作成） 2) 連携型アーカイブ普及事業 ・公開型シンポジウムの開催 3) 各連携先との会議の主催
NPO 法人熊本マンガミュージアムプロジェクト	1) 連携型アーカイブの構築事業 ・明治大学からの移送資料の仕分（正複調査） ・正本登録（明治大学仕様の目録データの作成） ・複本登録（移送用リストの作成）及び海外への移送 2) 連携型アーカイブ普及事業 ・公開型シンポジウムへの参加・発表
北京大学	1) 連携型アーカイブの構築事業 ・明治大学からの寄贈資料（複本資料）の受取 2) 連携型アーカイブ普及事業 ・公開型シンポジウムへの参加・発表 3) 連携会議への参加 ・資料保存技術への理解を深めるための京都国際マンガミュージアム（以下「京都 MM」）視察と人材教育
南米の連携先機関（7機関）	1) 連携型アーカイブの構築事業 ・明治大学からの寄贈資料（複本資料）の受取 2) 連携会議の参加 ・アーカイブの構築理念と役割を理解するための熊本共同倉庫視察と人材教育

※ 北京大学に関しては、2017年11月23日（木/祝）のシンポジウムに参加しており、連携理念・役割への理解については共有ができていたため、連携における資料保存技術への理解を深めるための連携会議を開催し、南米に関しては、本事業の根底である理念部分の共有をより強固なものにすることを目的とした会議を開催する。

第4章 実施スケジュール

4.1 事業スケジュール

事業団体	実施項目	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
明治大学	未整理資料の選定・搬出			①10/3 ②10/26 ③11/17 ④12/6				
	未整理資料の搬入			①10/6 ②10/31 ③11/21 ④12/12				
熊本共同倉庫	正本・複本の仕分け							
	正本登録							
	複本移送(→中国)							
	複本移送(→南米)							
	正本返送							
中国	移送資料の受入(中国)							
南米	移送資料の受入(南米)							

各連携機関にて行う作業スケジュールは、大きく上記の図のような流れで実施した。

具体的なスケジュールは下記のとおり

① 未整理資料 20,000 冊の整理作業

1. 明治大学の猿楽町校舎倉庫より計4回に分けて資料を選定・移送を実施
実施日程：2017年10月3日(金)・10月26日(木)・11月17日(金)・12月6日(水)
2. 熊本共同倉庫にて項目1で出庫された資料を受入れ
実施日程：2017年10月6日(金)・10月31日(火)・11月21日(火)・12月12日(火)
3. 明治大学関係者が熊本共同倉庫へ訪問し、倉庫・作業場の確認と、正本・複本の分別についての作業の流れを確認
実施日程：2017年10月19日(木)～20日(金)
4. 上記の3で決定した作業の流れに従って、正本・複本の選別を実施
実施日程：2017年10月19日(木)～12月28日(木)
5. 正本登録作業の現地確認のため、目録の教育担当者が熊本共同倉庫を訪問
作業場の確認と、正本登録～コンテナ保管までの作業手順を決定・確認
実施日程：2017年12月14日(木)～16日(土)
※教育担当者は並行して米沢嘉博記念図書館の目録担当者と登録規則について適宜確認し、仕様書を作成
6. 明治大学関係者が現地を訪問し、資料の返送作業手順を確認
実施日程：2018年1月4日(木)～8日(月)

第4章 実施スケジュール

7. 上記の6で決定した作業の流れに従って、正本を梱包（こんぼう）・返送

実施日程：2018年1月9日（火）・1月19日（金）・1月23日（火）・1月27日（土）・
2月5日（月）・2月13日（月）

② 整理作業にて抽出された複本の海外移送作業

1. 熊本マンガミュージアムプロジェクト所蔵資料から提供される資料を選定・リスト化・箱詰め

実施日程：2017年11月中旬～12月

2. 熊本共同倉庫にて①-4で抽出した複本をリスト化し、移送可能な資料を選定

実施日程：2018年1月12日（金）～14日（日）

3. 明治大学所蔵の複本の選定・リスト化

実施日程：2017年12月18日（月）～2018年1月12日（火）

4. 各連携先への複本の移送（発送）

海外移送は、それぞれの窓口となる担当者と協議を行い、「確実かつ安価」という理由で基本的には「郵便局の船便」にて実施した。ただし、エアフィット大学（コロンビア）に関しては、先方の治安の問題で船便の運航がなかったため、SAL便での移送となった。

<中国>

- ・北京大学

2017年12月7日（木）・2018年1月15日（月）・1月16日（火）・1月18日（木）・
1月26日（金）

<南米>

- ・ブラジル

- ・ブラジル文化福祉協会

2017年12月8日（金）・2018年2月2日（金）

- ・日伯文化連盟

2017年12月25日（月）・2018年1月31日（水）

- ・サンパウロ州教育局

→先方事情により移送せず

- ・サンパウロ大学 日本文化研究所

2017年12月25日（月）・2018年2月7日（水）

- ・アルマンド・アルバレス・ペンチアード大学

2018年2月8日（木）

- ・リオブランコ大学

2018年1月31日（水）

- ・コロンビア

- ・エアフィット大学

2018年2月2日（金）

第4章 実施スケジュール

③ 移送された複本資料の受入れ作業

海外連携先機関は、郵便にて移送された資料を受け入れ、整理・登録等、資料の利用に向けた作業の準備を行う。なお、郵便事情・暦事情によって、移送資料が到着する時期は2月～3月以降になるものと想定されるため、本格的な整理・登録等に関しては、次年度以降の事業課題となる。

4.2 実施会議・シンポジウムスケジュール

実施項目	実施日	開催場所	参加団体
事業開始会議	2017年10月8日(日)	明治大学 駿河台キャンパス 研究棟1F 図書館総務事務室内会議室	明治大学 NPO法人熊本マンガミュージアムプロジェクト
シンポジウム 「マンガ文化の保存拠点 計画」	2017年11月23日(木/祝)	明治大学 駿河台キャンパス グローバルフロント1F 多目的室	明治大学 京都精華大学 NPO法人熊本マンガミュージアムプロジェクト 北九州市漫画ミュージアム 漫画図書館Z 少年画報社 株式会社寿限無 コミックマーケット準備会 プロダクションI.G.
中間報告 省察会議	2017年12月8日(金)	明治大学 駿河台キャンパス 研究棟1F 図書館総務事務室内会議室	明治大学 NPO法人熊本マンガミュージアムプロジェクト
国内連携会議	2018年1月23日(火)	明治大学 駿河台キャンパス アカデミーコモン 8F A7・A8会議室	明治大学 京都精華大学 NPO法人熊本マンガミュージアムプロジェクト 北九州市漫画ミュージアム
海外連携会議 (南米)	2018年2月6日(火)	NPO法人熊本マンガミュージアムプロジェクト 共同倉庫事務室	明治大学 NPO法人熊本マンガミュージアムプロジェクト
事業省察会議	2018年2月7日(水)	明治大学 駿河台キャンパス 大学会館3階 第1会議室	明治大学 NPO法人熊本マンガミュージアムプロジェクト
海外連携会議 (北京大学)	2018年2月12日(月/祝)	京都国際マンガミュージアム 研究閲覧室	明治大学 北京大学 京都国際マンガミュージアム

・事業開始会議

2017年9月28日(木) 16:00～17:30

開催場所：明治大学駿河台キャンパス 研究棟1F 図書館総務事務室内会議室

本事業の連携先である明治大学・明治大学米沢嘉博記念図書館・NPO法人熊本マンガミュージアムプロジェクトのそれぞれの代表者・作業担当者が一堂に会し、今後の事業予定・作業内容について共有を行ったほか、10月19日(木)～20日(金)の熊本訪問に際しての訪問日程を調整した。

第4章 実施スケジュール

- ・シンポジウム「マンガ文化の保存拠点計画」
2017年11月23日（木／祝）13：00～18：20
開催場所：明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント 1F 多目的室
※第5章にて詳述
- ・事業経過確認会議
2017年12月8日（金） 16：00～17：30
開催場所：明治大学駿河台キャンパス 研究棟 1F 図書館総務事務室内会議室
米沢嘉博記念図書館・NPO 法人熊本マンガミュージアムプロジェクトの担当者にて、業務の進捗状況と問題点を共有。想定より作業が遅れており、事業期間内に目標値を完了させるための流れ等を確認した。
- ・国内連携会議
2018年1月23日（火） 13：00～14：30
開催場所：明治大学駿河台キャンパス アカデミーコモン 8F A7・A8 会議室
平成27年度から施設連携事業に関わっている各機関（京都精華大学・京都国際マンガミュージアム・北九州市漫画ミュージアム・NPO 法人熊本マンガミュージアムプロジェクト）の各担当者とともにこれまでの事業での事例共有と本事業における進捗状況・課題についての共有を行った。
- ・海外連携会議（ブラジル・コロンビア）
2018年2月6日（火） 13：00～14：45
開催場所：合志マンガミュージアム 会議室
南米の資料の受入れ機関の各紹介・共有と、今後連携関係を深め、人材教育を行うに当たっての課題点を確認した。
- ・事業省察会議
2018年2月7日（水） 13：00～14：40
開催場所：明治大学駿河台キャンパス 大学会館 3階 第1会議室
今年度事業の振り返りを、明治大学及びNPO 法人熊本マンガミュージアムプロジェクトにて行い、参加者にて問題点と課題を抽出、今後の事業継続に関する各種事項の共有を図った。
- ・海外連携会議（中国）
2018年2月12日（月／祝） 13：45～15：45
開催場所：京都国際マンガミュージアム 研究閲覧室
今後、北京においてどのように継続的な運用を図るかについて、実際に京都国際マンガミュージアムの実務担当者と話をし、課題の共有・抽出を図った。

第5章 実施内容

5.1 実施内容とその目的

- ・ 未整理資料の整理を利用した連携型アーカイブ構築と人材育成
明治大学が所蔵している未整理資料20,163冊をNPO法人熊本マンガミュージアムプロジェクトが置かれている熊本共同倉庫に移送し、各種作業を実施する。
「正本・複本」の仕分及び正本については米沢嘉博記念図書館仕様の目録作成を通じ、資料整理における知識と技術を持つ人材を育成する。
複本については海外の複数拠点に移送し、連携型アーカイブの更なる構築と、「マンガプールの出庫実験」の一環とする。
- ・ 公開型シンポジウムの実施
2017年11月23日（木／祝）に、明治大学駿河台キャンパス内にて「マンガ文化の保存拠点計画」と題された公開型のシンポジウムを開催した。
シンポジウムは、本事業の前身である「施設連携によるマンガ雑誌・単行本の共同保管事業」（京都精華大学）に参加した各連携先団体及び、マンガ文化のアーカイブ問題に取り組んでいる団体・企業を招聘（しょうへい）し、マンガ文化の保存のために連携型アーカイブをどのように構築していくか、その理念と課題の共有を図る目的で開催した。また、連携型アーカイブの構築と維持には、一般の理解と支持が必要となるため、公開型とした。

5.2 実施内容詳細

5.2.1 連携型アーカイブ構築と人材育成

明治大学が所蔵していない資料を「正本」、既に所蔵しているものを「複本」として分別し、それぞれが活用できるように整理を行う。分別したものの活用方法は以下のとおり。

「正本」＝ 明治大学米沢嘉博記念図書館への所蔵を前提として、目録データ整備及び、保存整備（装備）を行う。また、正本として登録されたデータは、文化庁メディア芸術データベースへ反映する。

「複本」＝ 海外連携先となる中国（北京大学）及び南米（ブラジル・コロンビア）に移送し、アーカイブ構築に利用する。移送に不適切な資料に関しては、熊本共同倉庫へ寄贈する。

上記工程を通じて、明治大学—熊本共同倉庫が連携し、「明治大学の所蔵目録」の作成及び、熊本共同倉庫にてマンガ資料の取扱い・目録知識を有した人材を育成する環境の整備・準備を行う。なお、人材育成の観点より、雑誌・単行本の両方を処理するのではなく、まずは単行本の処理に特化し、目録作成の基礎力を養成するという目的で、整理資料対象はすべて「単行本」とした。

第5章 実施内容

また、抽出した複本に関しては、「連携型アーカイブの構築」の促進と「マンガプールの出庫実験」の一環として、海外連携先（中国及び南米）に移送する。

5.2.1.1 正本・複本の分別

熊本共同倉庫で実施。

明治大学より移送されてきた資料 20,163 冊を正本・複本に分別する。分別に際しては、文化庁のメディア芸術データベースを利用し、米沢嘉博記念図書館の所蔵状況を確認する。

当初は正本抽出とその後の入力作業を並行して行っていたが、正本比率が想定以上であることが明らかになったため、11月より、正複調査を優先して作業を進める手法に切り替えた。

正本・複本の種別が一見して分かるよう、あらかじめ寄贈者名と明治大学から熊本共同倉庫への移送時に付与した箱番号が入ったスリップを挟み、正本は「黒」で、複本は「赤」でマーキングし、それぞれ保管場所も明確に分けるようにした。

移送時の箱番号・寄贈者が入ったスリップを利用することにより、それぞれの資料を移送/正本登録する際に、「移送日時」と「寄贈者」が作業終了まで可視化できるようにした。

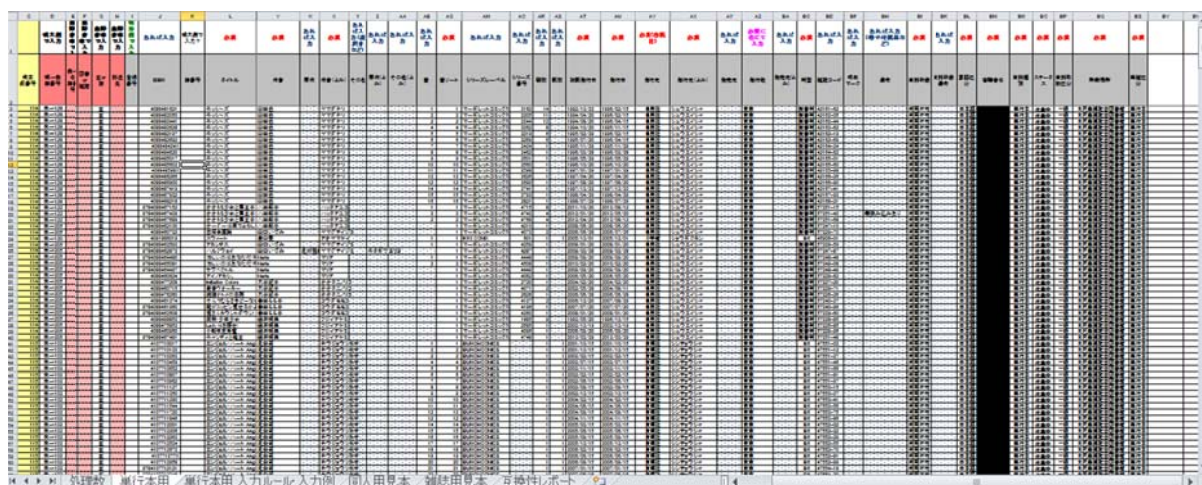
過年度までの連携事業においては「複本」の整理を中心とした業務を担っていた経緯があり、これまでの培ってきた経験値では補えない作業工程が相当数、発生した。

5.2.1.2 正本の登録・返送

正本の登録・移送に関しては、明治大学（米沢嘉博記念図書館）と熊本共同倉庫が連携して作業を進めた。

- ・ 正複調査で抽出された正本は、熊本共同倉庫スタッフが米沢嘉博記念図書館より提供されたシートに入力。

提供された Excel シートには、熊本共同倉庫にて資料管理を行うために明治大学からの移送時に付与した箱番号と、熊本から資料を返送する際の出納に利用する箱番号欄等を追加し、資料管理兼目録登録用のシートとして活用した。



The image shows a screenshot of an Excel spreadsheet. The spreadsheet has a wide range of columns, many of which are highlighted in red and black. The rows contain text, likely representing book titles, authors, and other metadata. The spreadsheet is used for tracking and managing the books, as mentioned in the text.

第5章 実施内容

- ・ 米沢提供の Excel データの入力項目は全部で 64 項目あり、所蔵情報を入力する分、メディア芸術データベースよりも入力項目が増加した。そのうち、単行本登録では使用しない 24 項目を非表示とし、入力が必要となる項目（最大 20 項目）と、管理用に追加した 6 項目のうち、4 項目（熊本仮箱番号・明治から移送された際の箱番号・資料種別）図書 or 雑誌の重複種別を入力対象とした。
- ・ 登録完了したデータは一定数 (2,500 冊以上) 蓄積した段階でデータ内の重複がないかを調査し、形態（サイズ）・著者・タイトル・巻で並べ替え、米沢嘉博記念図書館に「初回分」として提出。
- ・ 米沢嘉博記念図書館は提出されたデータをチェックし、改善事項を共有。
- ・ 熊本共同倉庫では提出データ分の資料を箱詰めし、最終的な保管箱番号の元となる「仮箱番号」を付与する。同仮箱番号を反映させた提出データは、米沢嘉博記念図書館に「二回目分」として提出。
- ・ データ提出後、熊本共同倉庫から資料を移送。
- ・ 「仮箱番号」が付与された「二回目分」のデータを受け取った米沢嘉博記念図書館は、正式な資料番号・保管箱番号などを付与し、管理用スリップに出力。
- ・ 明治大学に返送された正本資料は、保管箱ごとのバーコード貼付、現物とリストの確認、単冊管理用スリップ作成（蔵書印・単冊バーコード）の挟み込み、単冊ごとの規定袋への封入など、米沢嘉博記念図書館仕様の保管関連装備を行い、猿楽町校舎内の保管庫に戻す。
- ・ 正本資料の保管関連装備は当初、一部作業を除き熊本共同倉庫にて行う予定としていたが、熊本共同倉庫での正本登録工程が想定以上に多岐にわたったため、作業スペースの問題もあったものの明治大学で対応する方針に切り替えた。

5.2.1.3 複本の登録・移送

熊本共同倉庫で実施。

- ・ 重複調査によって抽出された複本は、移送先への資料タイトル報告のために、米沢より提供の Excel シートに入力。複本は目録データを作成する必要がないため、ISBN・タイトル・著者・巻数・寄贈者とのみの入力とした。
- ・ 入力作業が完了した複本は一時的に共同倉庫内の書架に作家・タイトルで区別をして配架。海外移送に適さない過度な性的・暴力表現がある資料は書架から抜き出し、移送タイトル候補から外した。
- ・ 今回、明治大学から熊本共同倉庫に移送した 20,163 冊の中から、当初想定していた複本冊数の抽出が困難であったため、熊本マンガミュージアムプロジェクトからの寄贈、及び明治大学が保有している複本から改めて資料を選定の上、海外へ移送した。

5.2.2 シンポジウムの開催

シンポジウムタイトル：「マンガ文化の保存拠点計画」

日時：2017年11月23日（木／祝） 13：00～18：20

第5章 実施内容

会場：明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント 1F 多目的室

司会：森川嘉一郎（明治大学 国際日本学部准教授）

登壇者：（五十音順／敬称略）

青木保（国立新美術館 館長）

赤松健（マンガ家、マンガ図書館Z 取締役会長、日本漫画家協会 理事）

池川佳宏（株式会社寿限無／メディア芸術データベースマンガ分野コーディネーター）

里見直紀（コミックマーケット準備会）

土屋恵一郎（明治大学学長）

中川大地（明治大学 野生の科学研究所 研究員、評論家、編集者）

橋本博（NPO 法人熊本マンガミュージアムプロジェクト代表）

福地健太郎（明治大学 総合数理学部准教授）

筆谷芳行（株式会社少年画報社取締役／「ヤングキングアワーズ」編集室・コミックマーケット準備会共同代表）

古市雅子（北京大学副教授／「明治大学漫画図書館閲覧室」館長）

宮本大人（明治大学 国際日本学部准教授、北九州市漫画ミュージアム研究アドバイザー）

山川道子（株式会社プロダクション I.G アーカイブグループ グループリーダー）

吉村和真（京都精華大学 副学長/国際マンガ研究センター教授）

シンポジウムは 5 部構成で行われ、登壇者それぞれが関わる分野でのアーカイブ化・人材育成に関する現状報告・課題報告が行われた。

当日は、定員 195 名に対して芳名帳に記入した人数が 185 名・18 時までの入場人数（延べ数）が 220 名（イベント設営会社調べ）と、盛況であり、マンガ文化が一般に対して影響力を持つコンテンツであることが察知された。

長時間のシンポジウムであったため、内容に関しては下記に要約のみを記載する。

<第1部> 基調会談（青木保・土屋恵一郎）

明治大学は日本のサブカルチャーを研究・発信する学部・施設を有していることを背景に、マンガ・アニメ・ゲームを中心とするサブカルチャーを収集・保存するアーカイブ施設の設立構想を持っている。

マンガ・アニメ・ゲームを中心とするサブカルチャーが世界中の注目を浴びている中で、「文化外交」の一環として、これらを世界に発信していく必要がある。発信するためには、それらを学術として取り扱う研究拠点としての施設の設立が必要になってくる。

国立新美術館でも、マンガ・アニメを扱うイベントを開催しており、世界内外の注目を集めている。日本文化を世界に発信していくのは、単館で行うのではなく、施設間で連携することが、今後必要になる。特に、資料を収集し、学術的な側面を取り扱う大学の施設と連携することで、より厚みを増した日本文化の紹介が可能となるのではないか、という可能性が示唆された。

第5章 実施内容

<第2部> 『マンガ図書館Z』とマンガミュージアム計画（赤松健）

「アーカイブ」は、物理的なものを保存するだけでなく、保存対象をデジタル化した上で保存するという手法もある。書籍等のデジタル化については、国立国会図書館が中心となって実施されているが、国立国会図書館のデジタル資料の多くは館内での公開にとどまっている。

赤松健氏はマンガ家という立場から、現在のマンガのデジタル化を取り巻く状況と、それに対する取組を行っており、第2部ではその取組を行うに至る背景を含めた紹介が行われた。

現在、日本で刊行されるマンガの多くは、新しいもの・既に絶版になっているものに関わらず、「海賊版」で無料公開されている。海賊版は、読む側には無料で読める利益が生じるが、クリエイター（作者）の利益を侵害している状況がある。マンガ図書館Zは、作者と読者のために、海賊版以外の方法でデジタルマンガを提供することを念頭に活動し、出版社で扱っていない絶版マンガなどを広告付きでアップロードし、「広告収入」が作者に入るような仕組みを作った。また、海賊版でアップロードされているものに関して、作者に直接確認を取り、希望があればそのデータを流用してマンガ図書館Zのコンテンツとして公開、利益が作者に流れるような取組も行っており、「黒いものを白くする」という過程を踏まえた上で、デジタル化されたあらゆる資料を「Re活用」し、作家（クリエイター）の権利が守られるような形で、利用されることを最終目標とし、また、デジタル化に関しては、マンガの表現に規制がかかるケースもあるため、現役作家が主導することによって行うことが重要であることを提示した。

<第3部> 日本のマンガにおける同人界と商業界の複合構造（筆谷芳行・里見直紀）

第3部では、マンガ文化における、2つの流れ「同人界」と「商業界」の複合的な関係について、同人誌業界と商業誌業界の過去40年の流れを追いつつ、同人誌業界と商業誌業界の関わりがどのように変化してきたのかを確認し、共同倉庫・連携型アーカイブの必要性を確認した。

同人誌業界は、当初は商業誌業界とは別のものとして捉えられており、規模も小さい状況であったが、1980年代後半ごろより、同人業界から商業デビューする流れが徐々に定着してきている。また、商業作家がファンとの交流や商業マンガとは異なる作品を発表する場として同人誌を利用するなど、1人の作家が商業・同人を使い分けて自己表現を行う場面も生じており、同人誌業界と商業誌業界が密接につながりあう状況が生じている。

この40年間、同人誌・商業誌共に規模が拡大しており、出版される資料の量も増加傾向にある点で、双方ともに「資料の保存」という点で課題を抱えている。

商業誌においては、出版形態の多様化（単行本のみならず、コンビニマンガの登場など）や、グローバル化による多言語出版の状況によって、アーカイブする対象は増加傾向にある。出版社が主体となって保存をしないと、散逸したまま戻らないと見込まれているが、蓄積に対するスペースや整理保存を行う人員の不足が生じており、問題は先送りしている状態である。

同人誌に関しても、年々規模が拡大していることもあり、現在コミックマーケット準備会が保管している同人誌は300万冊を超えているが、いずれも活用されず、「死蔵」状態となっている。

第5章 実施内容

同人誌と商業誌が交わる過程で、商業誌で活躍している作家の研究をする際、同人作家時代の作品も研究対象となることが予想され、同人誌の活用を目的とした保存は必要なものと考えられている一方で、同人誌は二次創作物が多数を占めていることなどを理由に、作家本人が資料の保存や公開に関して難色を示すケースも少なくない。

同人誌・商業誌のいずれの場合も、今後の活用方法に関する課題を抱えているが、それ以上に、「保存をし続ける」ことそのものが課題となっている現状が浮き彫りになった。

<第4部>マンガ・アニメ・ゲームの保存（中川大地・福地健太郎）

第4部では、マンガ・アニメ・ゲームという不可分なメディア芸術のデジタルアーカイブ化に関して、それぞれの動向・保存についての現状と課題の共有を行った。

○マンガ分野（池川佳宏）

現在、文化庁事業の一環として行っているメディア芸術データベースの構築に関しては、マンガ・アニメ・ゲームというメディア芸術のアーカイブ化に際し、「施設」を作るのではなく、それぞれの作品がどれだけ存在し、どこに保存されているかをまとめるためのプロジェクトとして進行している。

2015年3月よりオープンし、2020年の完成版に向けて継続構築が行われているが、現在所蔵情報が掲載されている7機関（国立国会図書館・明治大学米沢嘉博記念図書館・川崎市マンガミュージアム、京都国際マンガミュージアム・大阪府立中央図書館国際児童文学館、北九州市漫画ミュージアム、プランゲ文庫）は、図書館と博物館が混在しており、データの取り方のルールも統合も目的としている。

データベースを構築することで、日本におけるマンガ・雑誌の出版数や、単行本化されたマンガのタイトル数や作家人数が見えるようになり、また、雑誌の目次情報などが一見して分かるようになったことで、雑誌における短命作品の傾向が分かるなど、研究促進に役立つ情報が可視化されるようになっている。

マンガ分野のパートナー団体として寿限無が現在取り組んでいる課題は大きく下記の3つが挙げられる。

① 2020年正式版完成後の運営体制。

その際、金銭面・技術面でいかに継続・継承していくかの検討を進めている。

② 現在収録対象としているのは現物資料であり、デジタル化された作品が対象外となっている。図書館と博物館ではデジタル化に関して法的な違いもあることや、技術的にもデジタル作品の収集・保存の手法が追いついていない現状が存在する。

③ マンガ・アニメ・ゲームを複合的に保存することの難しさ。

マンガ・アニメを連携してデータベース化しているが、アニメと連携しているのは2,500ほどになる。また、マンガが原作となるドラマが散発されている状況もあり、マンガ・ゲーム・アニメ以外のコンテンツをどうアーカイブ化していくかもテーマになっている。

第5章 実施内容

○アニメ分野（山川道子）

プロジェクト I.G ではアニメ制作もしているが、ゲームや実写作品の制作にも携わっており、それらに関わるものを利活用することを前提にアーカイブ化している。保存対象は業務資料・絵コンテなど制作に関わった中間成果物から商品・DVD・書籍、宣伝物までである。それらを活用して事業を行い、その事業が終了すると、またアーカイブ化し、それぞれの作品がどのように活用されてきたかが蓄積される仕組みで運用している。

アニメ作品に関わる資料は非常に膨大であり、社内の保管庫では賄（まかな）えず、倉庫会社にて蓄積しているが、年間約 570 万円の維持費がかかっている。維持に関しては、大きなアーカイブ施設が必要となると同時に、保存に関わる人員が必要となるが、現状では修繕に関しては紙やセル画の修繕等は専門の技師を外注して行っている状況である。

また、今後のアーカイブ継続を考えた際には、災害による損失や、アニメ会社が継続できなくなった際の受皿が必要となる。そういった意味においても、それぞれが連携したアーカイブを構築することは重要と考え、アニメの原画・関連書籍・制作資料がどこに保管されているかを把握でき、保存する技術者が常駐し、必要に応じて取り出せる機関が必要とされていることが説明された。

○ゲーム分野（中川大地）

ゲーム分野のアーカイブに関する動きは 1980 年代のテレビゲームミュージアムプロジェクトによる出版物等から起こり始めた。当初は企画展・展示会という形で歴史を捉える試みが中心となり、1990 年代～2000 年代にかけて、様々な展示会が行われていた。

「図書館的」にアーカイブ構築を行い始めたのは、1998 年の立命館大学における取組が挙げられる。任天堂とセガが寄贈したタイトルをアーカイブ化したものであり、2009 年まで行われていたが、最新の進捗に関しては公開されておらず、把握ができていない状況である。

また、ゲーム保存協会によって、2011 年以降、コレクターからの寄贈を受けたパソコンゲームを中心としたゲームタイトルの保存活動も行われている。この活動に関しては、6,000 点が公開される予定になっている。磁気テープゲームの保存のノウハウが蓄積されており、管理体制が確立されている。ほかにも、2015 年にドワンゴの「ニコニコ超会議」中で、自作ゲーム文化のアーカイブ展示イベントが開催されており、ゲーム系のアーカイブが充実し始めている。

また、ゲームメディアそのものではなく、2016 年以降はゲーム業界周辺のオーラルヒストリーをまとめる動きも活発化している。

それぞれの企画やアーカイブ化の動きは散発的に行われており、連携した動きが必要とされる時期に入っている。

ゲームのアーカイブ化に関しては、ハードとソフトの両方が収集対象となるが、プレイするための媒体が一定しないという問題点を抱えている。タイトルそのものはマンガ等と比べると少ないが、媒体が多岐にわたり、それぞれの媒体の保存ノウハウが異なるため、閲覧環境を整備するのに、技術的な問題が生じているという、マンガ・アニメとは異なった課題が生じている。

第5章 実施内容

また、コミックのデジタル化問題と共通するものがあるが、2000年代オンラインゲームを主体としたタイトルの比重が大きくなっており、アーカイブそのものが難しい状況が生じている。サービスが終了したゲームに関しては、開発会社そのものが現存していないなど、既に追うことが難しい状況が発生し始めており、保存の方法論から考える必要がある。

(福地健太郎)

ゲームという分野においては、「人を夢中にさせる仕掛け」への研究が存在しており、プレイすることそのものが重要なファクターとなる。明治大学では、ファミリーコンピュータ・スーパーファミコンのカセット 1,850 本を保存しており、一部は利用できるような形でアーカイブ化を進めていることからわかるように、「動かせる状態で保存すること」が重要となるため、保存施設と動かし続けるための技術者をどう育成していくかも課題となっている。

ゲームそのものを文化として捉えるに当たっては、ゲームそのものの保存だけではなく、関連するアニメ作品や、設定資料集、攻略本などの関連資料の収集も必要とされる。

そのほか、商業ベースには乗らない同人ゲームなどのアーカイブが不透明な状況にあり、これらをどう保存していくかが課題となる。次善策として、同人誌やプレイ動画の保存が必要であり、またそれらを検索できるシステム作りも必要となるが、現状は研究者個人が蓄積しているにとどまっている。

これら前出の、マンガ・アニメ・ゲームのアーカイブに関するそれぞれの事例発表を踏まえ、連携型アーカイブ構築の必要性とそれらを維持していくには技術を持った人員育成の必要性が再認識された一方で、それらが持つ特性の違いから、いかにしてこれらの複合的なメディアを保存し続けるかという点について、ディスカッションが行われた。

池川氏からは、複合的なアーカイブの構築は必要ではあるものの、メディアの連結が技術的に難しい点が示唆された。山川氏からは、マンガ・アニメ・ゲームというジャンルで区切って保存するのではなく、それらが収録されたメディアごとで保存・共有ができる環境を整えば、そこは問題ないのではという意見が出た。

また、日本ではメディアミックスが多く、分断して保存することはその関連性が見えなくなっているのではないか、という懸念も示唆された。

ゲーム研究に関しては、ゲーム固有の問題と捉えることが多く、メディアミックスで捉えるという視座が抜け落ちている点が明らかになった。ゲーム産業においては、保存は事業者によるところが大きく、引き続き遊べるような、新しい事業につながるような流れができると、「アーカイブ」という意識付けができるのではないかという意見もあり、保存に関して取り組むべき課題が、それぞれのジャンルの中にも山積されていることが明らかになった。

<第5部> マンガ・アニメ・ゲームの施設間連携に向けて

第5部では、これまで施設連携事業に関わった団体の代表者を招聘し、これまでの経緯と課題の共有を行った。

第5章 実施内容

○京都精華大学/京都国際マンガミュージアム（吉村和真）

施設間連携で必要なものは、「人」と考えている。必要としているスキルは3点ある。

- 1.専門性：マンガを扱う人たちをどう育成するのかという点が課題になるが、扱う人員は既にあるが、「コスト」がかかる。
- 2.持続性：京都国際マンガミュージアムは京都市と京都精華大学で共同して運営しているため、人員の「異動」が生じる。
大学側は長期展望で動いているので、明治大学もその観点での運営が望まれる。
- 3.創造性：既にいる専門家・集められているものをいかに活用するか、というのがテーマになる。
発表時に開催されていた「クッキングパパ」の企画展示を例に、京都国際マンガミュージアム・京都市・作者（出版社）が継続的に連携関係を保持することで、活性化につながることを示した。
また、明治大学のメディア芸術施設の建設案にも触れ、明治大学・東京という立地で、施設と人の連携関係を発展させた運営を望む主旨の発言も付け加えられた。

○北九州市漫画ミュージアム（宮本大人）

北九州市漫画ミュージアムの立ち上げに携わり、現在は研究アドバイザーとして関わっている。設立に関しては、「地元ゆかりのマンガ家を中心に収集保存し、研究する機関」をテーマとして、資格を持った学芸員と司書を配置している。

商業施設にあるので、収蔵庫に限界が生じている点が課題として挙げられたほか、「公共施設」として直面するであろう状況についての問題提起がなされた。具体的には、税金でマンガのアーカイブ化を継続する意義を市民に理解してもらい理由付けという点であり、マンガ全体が現在と同じような支持を得られなくなった際にどうするか、危機感を持ち続けているということであった。

○熊本マンガミュージアムプロジェクト／合志マンガミュージアム（橋本博）

当初、コレクターとして収集した自身のコレクションをどのように保存・活用していくかという考えから、熊本マンガミュージアムプロジェクトを立ち上げ、最終的に合志にマンガミュージアムを設立した経緯が説明された。

また、現在も継続している京都国際マンガミュージアムや北九州市漫画ミュージアムとの連携と、文化庁事業の中での人材育成継続についても説明がなされ、特に人材育成の点で、持続的に人材を雇用し続けるために、事業に関わった人材流出を防ぐ観点で、合志マンガミュージアムで継続雇用している点にも触れた。

現在の共同倉庫の現状と役割については、受け入れる資料は増加しており、資料のインプットとアウトプットのバランスを考えていく時期に来ていることが示唆された。今回の明治大学との連携では、海外に資料を送る役割も担っており、いかにアウトプットを進めるかを課題としている。

第5章 実施内容

○北京大学（古市雅子）

2014年11月に北京大学内に大学間交流の一環として、明治大学マンガ図書館閲覧室と銘打ち、20,000冊のマンガ単行本が収蔵された図書館が開館した。現在は、明治大学から寄贈された複本のみならず、個人寄贈による日本のマンガが中国語訳された単行本や雑誌・アニメCD・DVDも所蔵している。

開館することが優先されたため、資料の整理が完了していない点が課題として挙げられた。閲覧者も古市氏が教える学生・サークルのメンバーに限定している。整理完了後に北京大学全体への公開を想定しているが、誰がどのように運営していくかも定まっていない現状についても共有された。

中国国内では正規版マンガ書籍の流通が限られており、ほとんどの学生はスキャンされたマンガをオンラインで見るという経験しかなく、原本を手にとってみられる場所がないというのが現状である。明治大学マンガ図書館閲覧室を、日本のようにマンガを直接「書籍で見る」という経験を提供する場として活用するために、マンガ図書館同士の連携の一部に入れてもらえることで、促進を図りたいという意図が明確に打ち出された。

○セッション

- ・運営主体が異なる様々な施設が、「連携関係」で成り立っていることを踏まえ、連携促進に際し、最も必要としている人材像と雇用の継続に関する課題共有を行った。

以下、発言者ごとに要旨をまとめる。

吉村：衰退していくとどうなるかというイメージを持つことが大事である。

現在のマンガ関連施設の多くは、創立者の自発的な活動で作られている経緯がある。やりがいと頑張っている人たちがいて、ポストができていたが、ある程度環境が整うと、今度は「維持する」ためのロジックを用意することに苦労している。

今後も施設間で連携は必要であり、施設ができた際には必要な人員をその施設に送るような流れも生まれる。そのためには、施設同士と一緒に事業を行う必要がある。

宮本：吉村先生とは異なり、北九州市は役所主導で設立されているため、まずは資料収集・保存という理念がわかっている人を集めて、後ほどマンガを学んでもらう形にしていた。

公立施設は有期雇用が多く、一定期間で人員が変わってしまう。それはまずいのだという認識を持ってもらうために、専門性が必要であることを理解してもらう必要がある。

橋本：施設には2種類の人材が必要である。ひとつは作業人員で養成が必要なため、現在崇城大学の学生をリクルートして、育成している。もうひとつは専門人員で、必要があれば連携事業の中で人を派遣できる、そんな機能を備えたい。

古市：中国においては、マンガ文化のアーカイブ専門家が全く不在の状況である。

意欲のある学生はたくさんいるが、専門性に欠けることと、卒業等によって人が変わる懸念がある。

第5章 実施内容

長期的な面では、日本の中で留学生を育成して、中国に戻してもらいたい。

中国の学生は、紙は過去であり、アニメが最先端であるという認識があるので、そこをクリアする必要がある。中国には戦前からマンガの歴史があるので、国内文化を理解するためにも、マンガを取り扱う専門家は必要と考えている。

- ・アーカイブは、蓄積するだけではなく、活用される必要がある。

どういった企業とどういった連携を行うと、可能性が広がるかについても、一部共有を行った
吉村：京都精華大学では、事業推進室で産学連携がある。

出版社がマンガ施設に向ける目がやさしくなった。施設と企業で信頼関係ができてきたと考えている。また、地域図書館からの依頼・相談が増加している。指定管理制度による運営施設が増えており、地域商店街と協力してマンガを利用する機会も増えている。町との連携も対象に入れていくと人材が広がると考えている。

橋本：合志マンガミュージアムの設立に、地域紹介マンガの制作が関わっている。このマンガは、ドラマ化もされたことをきっかけに、行政からのマンガの目が変わった。地域からマンガへのニーズが上がっている現状を見ると、地域を柱にしたマンガ産業というものを作っていくのも流れかと考えている。

最後の質疑応答にて、マンガアーカイブ施設での人材は、いわゆる保存・整理に長けた人材以上の人材が求められており、その具体例についての質問があった。回答は複数あるものの、マンガ文化を取り扱う施設では、産業界と連携した企画も多々行われているという性質上、イベントの企画や対応が可能な人員が求められていることが明示された。

また、企画展示に長けた人員を、施設連携の中で確保し、必要に応じて活用する等の可能性も示唆された。

第6章 成果と課題

6.1 成果

6.1.1 明治大学の成果物

- ・ 移送資料 20,163 冊 (316 箱)
- ・ 正本の所蔵目録データ 17,540 点
 ※今後、メディア芸術データベースにも反映予定
 想定より正本数が 2,790 冊多く発生したが、事業期間内での登録と返送が完了した。

6.1.2 NPO 法人熊本マンガミュージアムプロジェクトの成果物

実施項目	実施日
処理冊数	20,163 冊 (正本:17,540 冊/複本 2,398 冊/登録外 225 冊)
正本登録 (1 人 1 時間あたり)	17 冊/時間
正本:複本:登録外	87:12:1

目録作成は、メディア芸術データベースに書誌登録がある資料はその情報を転記、登録がない資料ははじめから書誌を作成した。正本登録時間については、1 人あたり平均 17 冊/時間とした。

資料を保管する倉庫と作業を行う事務室が離れているため、登録対象資料・登録済み資料の運搬作業が日々発生。運搬と登録を兼務するスタッフはかなりの負担となった。

6.1.3 北京大学の成果物

明治大学・熊本マンガミュージアムプロジェクトからの移送資料 1,059 冊

6.1.4 南米連携機関の成果物

明治大学・熊本マンガミュージアムプロジェクトからの移送資料 3,454 冊

6.2 課題

6.2.1 事業全体の課題

本事業は、過年度からの経験をベースとし、正本は、所蔵館ルールを踏襲した形での目録データ作成、複本は、目標数の海外移送を実施後、それ以外の資料を熊本共同倉庫内に「プール」した。その過程を通じて、人材育成環境の整備を行うことを主な目的としていた。

未整理資料の整理開始後、正本の比率が想定より高いことが判明し、特に正本の目録登録作業は過年度の経験値だけでは作業が難しく、明治大学・熊本共同倉庫双方にて様々な確認事項が発生したため、正本の目録登録業務が事業全体の大きな割合を占めるに至った。

各連携先の詳細の課題については、以下の各館の課題にて報告する。

第6章 成果と課題

6.2.2 明治大学の課題

連携共同事業には今年度、初参画という経緯もあり、以下の課題が生じた。

① 未整理資料移送

本事業においては、未整理資料の数値（20,000 冊）と、海外移送のための複本の数値（5,250 冊）を事業計画に盛り込んでおり、その数値の達成をひとつの作業指標としていた。しかし、実際には上記のとおり、移送した未整理資料からは想定していた複本数が抽出できず、熊本マンガミュージアムプロジェクト、及び明治大学が所蔵していた複本を含めて海外へ移送することとなった。

複本の海外移送は連携共同事業の大きな柱であることから、今後は、未整理資料の仕分後に発生した複本のみを移送するなど、「未整理資料」という不確定要素を十分に加味した事業計画の策定が必要と思われる。また、今回のような想定外の事象（複本率が想定より低いという事象など）が生じた場合の対応策についても、事業計画策定若しくは事業開始の時点で検討する必要があると思われる。

② 正本登録の課題

過年度事業において、熊本共同倉庫では、メディア芸術データベースへの登録は経験していたものの、米沢嘉博記念図書館のローカルルールを踏まえた登録経験はほぼ皆無の状況だった。メディア芸術データベースと所蔵館のローカルルールの間が生じる差異は、本事業スタート時にある程度、想定されていたが、事前の確認作業が不十分だったことは否めず、それが結果として、事業計画以上の正本登録作業において多少の混乱を招くことにつながった。

この点については、正本登録作業を通じて「仕様書（付録参照）」を整備しており、同様の混乱は回避できると思われる。

③ 作業スペースの確保

本事業では作業の大半を熊本共同倉庫にて実施の予定だったが、正本の目録登録が事業の大きな割合を占めたため、一部の装備作業を明治大学図書館総務事務室の本事業の事務スペースにて実施することになった。想定外の事象だったこともあり、同スペースの狭隘（きょうあい）化が激しく、作業効率の悪化を招く事態となった。

連携共同事業でもあり、各種作業は原則として、連携先の熊本共同倉庫にて実施することが望ましいが、未整理資料ゆえイレギュラーが発生する可能性があること、共同倉庫はその性格上、雑然とし過ぎていることなども踏まえ、正本返送後に最終確認可能なスペースの確保も検討する余地があると思われる。

6.2.3 NPO 法人熊本マンガミュージアムプロジェクトの課題

熊本共同倉庫での作業に際しては、過年度と同様に「保管環境の整備」「倉庫内での作業環境の改善」も継続課題として残っているが、本事業を通じ、また連携事業を継続するに当たっての課題点も浮き彫りになった。詳細は以下のとおり。

① 未整理資料整理における人材育成

第6章 成果と課題

過年度までは複本登録が主な作業だったが、今年度は、未整理資料における正本登録と移送、海外への複本移送といった未経験業務が多く、手探り状態での業務遂行となった。

事業計画は事前に把握していたものの、人員体制は過年度から参画していた人員を中心としていたこともあり、多岐にわたる初めての業務の全体管理を連携先である「熊本」のスタッフが担うことは難しい状況であった。

事業主体は飽くまで「東京」にあり、事業全体の管理者は東京に置かざるを得ないものの、「正本登録」「正本移送」「複本登録」「海外移送」「スタッフ管理」など、多岐にわたる現場での各業務の遂行責任を担える人材の育成は継続的な課題となっている。

② 正本登録の課題

上記の明治大学の課題でも記載したが、過年度と今年度の正本登録の業務は大きく違っていた。特に米沢嘉博記念図書館とメディア芸術データベースの正本登録の「仕様」の違いは大きく、熊本共同倉庫スタッフの従来までの経験・知識では登録作業の円滑な進捗は難しい状況であった。

登録作業の進捗速度を上げるため、文化庁よりメディア芸術データベースのメタデータを御提供いただき、明治大学にて独自のデータベースを構築の上、登録作業の工程を見直した結果、登録数が大きく伸びたものの、メディア芸術データベースに準拠しないローカルルールをベースとした登録作業は、マンガ登録に長けたスタッフと独自システム構築が必要不可欠と思われる。

③ 共同倉庫の将来像

熊本共同倉庫の性格上、現在においても他機関や個人からのマンガと雑誌などの寄贈を継続的に受け入れており、熊本共同倉庫の収容スペースが限界に近づいている。

過年度からの連携共同事業において、「複本の収蔵先（複本バンク）」としての機能を充実させるという構想があり、本事業においても熊本共同倉庫でプールしている複本を海外の連携先に寄贈したが、倉庫の狭隘化解消が喫緊の課題となっている。

一方で、国内外の各施設にプールしている複本を寄贈するには高度なノウハウとかなりの手間が必要であり、複本収蔵先の拡充も待ったなしの状況。複本の「インプット（受入れ）」と「アウトプット（寄贈）」をセットで進めていくことが望まれる。

6.2.4 北京大学の課題

北京大学漫画資料室（明治大学マンガ図書館閲覧室）には既に明治大学より約 20,000 冊のマンガ資料が寄贈されており、その大半が出版社、タイトル、作者ごとに書架に並んでいる。このような環境の中、今年度は約 1,000 冊の複本の移送を行った。一部の学生を限定した利用環境において、現在の問題点と課題、その解決方法を検討した。

① 人材育成について

- ・ボランティア学生の育成

図書室は日本に興味のあるボランティア学生が運営している。学生は卒業してしまうため、運営の継続性をどう担保するかが課題となる。

② 連携先の資料整理について

第6章 成果と課題

- ・移送資料の内容

今年度は複本移送を前提とした事業であり、現時点では資料室資料の所蔵登録も行われていないことから、タイトルや巻号指定の要望には応えきれていない。今後、寄贈数が増加するに従い、タイトルの選定が難しくなる。

- ・マンガ資料以外の整理方法

資料室には映像関連資料なども複数あるが、マンガ資料と同様、整理方法のノウハウが不足している。図書館的ではなく、博物館的な整理方法も視野に入れた総合的な整理方法も検討したい。

- ・目的資料への誘導方法

日本語理解の有無に関わらず、学生を目的の資料に誘導する方法が課題となっている。上記を含めた課題解決のためには、資料室を訪問の上、学生利用者のニーズをヒアリングすることが必要不可欠と思われる。

6.2.5 南米連携機関の課題

今年度の連携共同事業に参加した南米 6 機関はすべて、明治大学と友好関係を結んでいる施設であり、日本マンガの受入れの準備が整っている状況だった。今回の移送以前に日本マンガを所蔵している機関も複数あり、日本のマンガ文化への理解が一定以上は進んでいる環境もある。

今年度は南米への移送期間の問題もあり、事業期間内にすべての関係機関に資料の到着が間に合わないため、資料到着後に予想される課題の抽出を行った。

① 人材育成について

- ・南米連携機関に向けた教育体制の整備

南米の各連携機関に対するマンガ資料の取扱い対応窓口を整備・確立するほか、各種質問に回答するだけではなく、マンガの専門家を現地に派遣し、具体的な整理方法を指導する体制を検討する。

- ・南米での人材育成体制・連携関係の強化

南米の各機関にて蔵書と人材の連携を図り、資料の整理スキルや情報の共有システムを構築する。

② 連携先の資料整理について

- ・移送資料の内容

今年度は複本移送を前提とした事業であり、各連携機関に移送した資料タイトルと冊数が各ニーズと合致しているかは、資料到着後の確認となる。移送資料のすべてを配架するのか、読者層を考慮した限定配架をするのかなども大きな課題となりうる。

限定配架の場合は、移送元の日本側においてその基準を設定する必要がある、この点を考慮しても、現地の各機関のニーズをヒアリングするための現地訪問が必要かと思われる。

第7章 総括

本事業は、過年度まで京都精華大学が主体となって実施した事業を踏襲しつつ、マンガ資料の連携型アーカイブの海外への展開と構築、それに伴ってマンガ単行本の取扱いに習熟した国内外における人材の育成を主目的としたものであった。

過年度はメディア芸術データベースに登録するデータを作成し、それを京都国際マンガミュージアムが流用するという形で、京都国際マンガミュージアムの正本データを OPAC 上に作成・登録するという流れであった。

今年度は、明治大学が主体となり、以下の3事業を実施した。

- ①明治大学米沢嘉博記念図書館が寄贈を受けた未整理資料を整理し、正本を整理登録する事業
- ②複本を海外連携先に移送する事業
- ③シンポジウムの開催

各事業における個々の成果と課題は上記にて記載したため、本章では事業を総括した上で、今後に向けた課題を挙げたい。

本事業には今年度、明治大学としては初めて参加したこともあり、まずは事業計画書の遂行を最大のミッションとした。

結果として、事業計画書に記載した3事業は無事に完了したものの、大盛況だった「シンポジウムの開催」以外は様々な課題が残る結果となった。

米沢嘉博記念図書館から移送した20,000冊の未整理資料の整理は、当然のことながら、整理を始めてみないと正本・複本の区別が付かず、事業計画書以上の正本を登録することになった。ローカルルールを加味した熊本共同倉庫での正本登録作業は、過年度までの経験だけでは難しく、マンガ整理にはその経験とノウハウを持つ人材と、さらに効率よく作業ができる良好な職場環境がいかに重要かを痛感した。

熊本共同倉庫の役割は飽くまで「倉庫」であり、今後に向けて、保存拠点と作業拠点の役割を併せ持つ施設の整備が必要と思われる。

正本登録の方法にも課題が残った。正本データは今回 Excel 登録を仕様としたが、15,000件を超えるマンガ書誌データを Excel に登録する作業は、登録者の PC スキルに大きく依存すること・Excel のバージョン違いよりデータ集約時にバグが発生するケースがあること・人力による大量の書誌データのチェックにはおのずと限界があることなど、いくつかの課題と改善点が散見された。

事業内の各種会議でも、メディア芸術データベースの有効活用に関する議論が多々あったが、マンガ資料の整理とアーカイブ化には統一化された目録作成ルールに基づく「データベース」が絶対的に必要不可欠であり、海外での利活用も視野に入れた仕組みの構築に努力したい。

海外連携先への複本移送は、未整理資料の整理の段階で複本が不足したこともあり、移送時期が北京大学、南米各機関ともに予定より遅延したが、それ以外は概ね順調に推移した。

海外連携会議については、現地担当者のアーカイブ構築に対する理解、習熟と各地の状況をふまえるために、南米各機関分を熊本共同倉庫・合志マンガミュージアム、北京大学分を京都国際マンガミ

第7章 総括

ミュージアムにて実施した。現地での指導についても、実際の業務を見て、有識者の意見を聞くことで、より効果的な指導法を検討することができるため、海外連携先の担当者と国内移送側の関係者が参加した会議は、更なる海外連携に向けた有意義なものとなった。

いずれの海外連携会議においても、本来なら資料到着後、資料整理をはじめとする人材育成の観点から現地訪問が必要と思われるため、海外連携先とは長期的な視野に立った継続的な連携が必須となっている。

2017年11月23日（木／祝）に実施したシンポジウム「マンガ文化の保存拠点計画」は、マンガ文化の展示、保存・アーカイブ構築に関わる内外の専門化を招き、拠点となる施設の実施に向けた様々な角度からの検討を公開の場で行った。複数のメディア取材や地道な広報活動も功を奏したのか、参加者も200名を超え、熱気あふれる意味深いシンポジウムとなった。マンガ、アニメ、ゲームの更なる連携により、保存拠点計画の推進を目指したい。

最後に、今年度も本連携共同事業の中心となった熊本共同倉庫の課題を再度、挙げてみたい。熊本共同倉庫は現時点において、複本プール先として十分に機能している。多くのマンガ関連施設が、収蔵スペースの狭隘のために新たなマンガの受贈を停止している中、現在も寄贈を受け入れている熊本共同倉庫の役割は極めて大きい。当然、全国各地のマンガ関連施設に対し、継続的に複本の提供を行っているが、法人・個人からのマンガ雑誌・単行本の寄贈の申込みは絶えることなく、同共同倉庫の収容能力もほぼ限界に近づいている。

マンガ文化の保存拠点計画の実現に向けて、熊本共同倉庫はマンガ雑誌・単行本の複本プールのパイオニアとしての役割は継続しつつも、様々な機能を併せ持つ新たな共同倉庫の設置が望まれる。

以上

付録

2017年11月23日(木/祝)シンポジウムの広報物・新聞記事など

・シンポジウム告知ポスター・チラシ

平成29年度 メディア芸術連携促進事業
シンポジウム

マンガ文化の



2017年 **11月23日** (木・祝)
13:00 開始 (~18:20)

会場: 明治大学 駿河台キャンパス
グローバルフロント1F 多目的室
(千代田区神田駿河台1-1、JR御茶ノ水駅徒歩3分)

登壇者: 青木保 (国立新美術館館長)
赤松健 (漫画家、「マンガ図書館Z」取締役会長、
日本漫画家協会理事)
池川佳宏 (寿限無メディア芸術データベース (開発版)
マンガ分野コーディネーター)
里見直紀 (コミックマーケット準備会)
土屋恵一郎 (明治大学学長)
中川大地 (明治大学野生の科学研究所研究員、評論家、編集者)
橋本博 (熊本マンガミュージアムプロジェクト代表)
福地健太郎 (明治大学総合数理学部准教授)
兼谷芳行 (少年画報社取締役/「ヤングキングアワーズ」編集長
コミックマーケット準備会共同代表)
古市雅子 (北京大学副教授/「明治大学漫画図書館閲覧室」館長)
宮本大人 (明治大学国際日本学部准教授、北九州市漫画ミュージアム研究アドバイザー)
山川道子 (株式会社プロダクションIG アーカイブグループ グループリーダー)
吉村和真 (京都精華大学副学長/国際マンガ研究センター教授)

司会: 森川嘉一郎 (明治大学国際日本学部准教授)

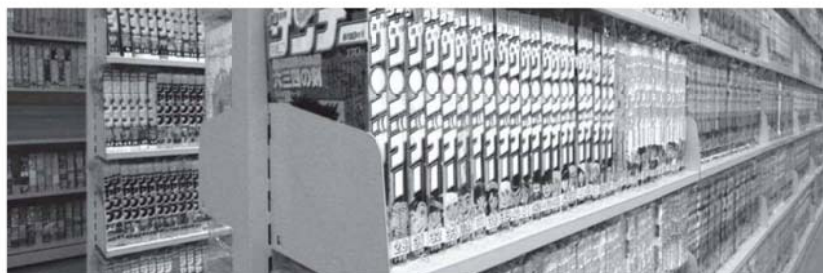
お問合せ: 03-3296-4629 (明治大学 文化庁連携共同事業窓口)

主催
文化庁 / 明治大学

(チラシ裏面)

平成29年度 メディア芸術連携促進事業
シンポジウム

マンガ文化の



マンガ文化の展示・保存・アーカイブ構築に関わる内外の専門家を招き、拠点となる施設の実施に向けたさまざまな角度からの検討を、公開の場で行います。

プログラム

13:00～13:05 開催挨拶

13:05～13:35 基調対談

青木保 (国立新美術館館長)

土屋恵一郎 (明治大学学長)

13:40～14:10 『マンガ図書館Z』とマンガミュージアム計画

赤松健 (漫画家、「マンガ図書館Z」取締役会長、日本漫画家協会理事)

森川嘉一郎 (明治大学国際日本学部准教授)

14:10～14:40 「日本のマンガにおける同人界と商業界の複層構造」

筆谷芳行 (少年画報社取締役／「ヤングキングアワーズ」編集長、コミックマーケット準備会共同代表)

里見直紀 (コミックマーケット準備会)

15:00～16:30 「マンガ・アニメ・ゲームのアーカイブ」

池川佳宏 (寿限無メディア芸術データベース (開発版) マンガ分野コーディネーター)

中川大地 (明治大学野生の科学研究所研究員、評論家、編集者)

福地健太郎 (明治大学総合数理学部准教授)

山川道子 (プロダクションI.G アーカイブグループ グループリーダー)

16:50～18:20 「マンガ・アニメ・ゲームの施設間連携に向けて」

橋本博 (NPO 法人熊本マンガミュージアムプロジェクト代表)

古市雅子 (北京大学副教授／「明治大学漫画図書館閲覧室」館長)

宮本大人 (明治大学国際日本学部准教授、北九州市漫画ミュージアム研究アドバイザー)

吉村和真 (京都精華大学副学長／国際マンガ研究センター教授)

司会：森川嘉一郎

の保存拠点計画

付録

<明治大学広報 HP>

シンポジウム「マンガ文化の保存拠点計画」，明治大学広報第 710 号（2017 年 12 月 1 日発行）

(https://www.meiji.ac.jp/koho/meidaikouhou/201712/p02_02.html)

<取材メディア>

「マンガ、アニメ、ゲームのアーカイブは日本の緊急課題 森川嘉一郎明治大学准教授が語るシンポジウム「マンガ文化の保存拠点計画」の意義」，大学公開講座の検索 まなナビ，2017.11.18 公開

(<https://mananavi.com/%E3%83%9E%E3%83%B3%E3%82%AC%E3%80%81%E3%82%A2%E3%83%8B%E3%83%A1%E3%80%81%E3%82%B2%E3%83%BC%E3%83%A0%E3%81%AE%E3%82%A2%E3%83%BC%E3%82%AB%E3%82%A4%E3%83%96%E3%81%AF%E6%97%A5%E6%9C%AC%E3%81%AE%E7%B7%8A/>)

「とある資料の保存施設（小原篤のアニメゲ井）」，小原篤，朝日新聞デジタル，2017.11.27

(<https://www.asahi.com/articles/ASKCS46JBKCSUCVL00J.html>)

付録

各会議の議事録

連携会議・省察会議の議事録を下記にて記載する

- ・2018年1月23日（火） 国内連携会議

実施日	2018年1月23日（火） 13:00 ～ 14:30	実施場所	明治大学 駿河台キャンパス アカデミーコモン 8F A7・A8 会議室
目的・議題	H29年度 文化庁連携共同事業 国内連携会議		
出席者 (敬称略)	学校法人明治大学：森川嘉一郎・菊池亮一・伊能秀明・柴尾晋・齋藤宣彦 NPO 法人熊本マンガミュージアムプロジェクト：橋本博 学校法人京都精華大学/京都国際マンガミュージアム：吉村和真・関口正春・伊藤遊 北九州市漫画ミュージアム：表智之 文化庁：吉田敦則 大日本印刷株式会社：岩川浩之 日本アスペクトコア株式会社：柳澤紳介・藤本真之介・武中典子・小林真理		

連絡・審議・決定事項	発言者(敬称略)
<ul style="list-style-type: none"> ・会議趣旨説明(今年度事例の共有と施設連携事業としての課題の共有) ・自己紹介 	森川 参加者全員
1. 今年度の動向報告 ①明治大学（以下明大） <ul style="list-style-type: none"> ・今回の事業(①未資料整理の整理②海外への複本寄贈を通じた資料保管連携③本共同事業の社会的共有のためのシンポジウム開催)について、③のシンポジウムは11/23に開催したことで、①②の事業は継続中である。 ・①②の事業の進捗状況について、配布資料を元に報告。 ・武中報告の補足として、正本登録の前にいったん複本抽出を行ったが、正本登録の過程で抽出されるものもあり、現時点でも変動があることと、当初の複本抽出の段階で成果予定値を下回っていたため、明大内ですでに存在している複本と NPO 熊本マンガミュージアムプロジェクト(以下クママン)からの寄贈にて補っていることを報告 ・2017年11月23日に開催されたシンポジウムにて、マンガのアーカイブ化・同人誌/商業における保存・アニメ・ゲームのアーカイブ化・施設連携に関して、それぞれの当事者による報告を踏まえ、<「シチズン・アーカイブ」構築の布石として、市民に事業を周知し、市民の意見を聞くこと>と、<「マンガ」とは不可分とされるゲーム・アニメーションも含めた保存・施設間連携における課題の共有>という目的が達成でき、また、各関係者によるツイートや事前取材はあったものの、ほとんど宣伝がない状態で200名以上を動員した。 ・本年度事業の「未整理資料の整理事業(作業)」に関する課題について 「人材」という点での課題を感じた。目録データ作成に関しては、登録者のPCスキル・機器選定・作業環境・スキル人材の雇用の継続性という面において、難しさを感じた。また、別途移送に際しては、登録担当者とは別途移送準備(力仕事)に対するマンパワーの確保が困難であった。初めての事業ということで、手法や育成環境を模索しながら実施していたことから、事前準備の重要性を大きく感じた。ただ、事前準備に関しては、今後の事業継続の中で解消されるとみている。 →人材・環境に関しては、熊本側の問題がある。 今回は前年度に比べて作業効率が低下している。一因として、従来の事業よりも正本の数が多く、処理に時間を要している側面がある。作業前の事前作業の必要性を感じた。 	齋藤 武中 柳澤 森川 柳澤 橋本

付録

<p>過年度より事業に従事・育成してきた人員の継続雇用が難しい状況であり、既に何名かは所属していない。事業の性質上継続雇用は難しいことを理解しており、クママン側でも継続雇用の道は模索している。</p> <p>環境に関しては、倉庫と作業場が離れており、倉庫・作業場間での資料の運搬にもマンパワーが必要であること、倉庫の季節による環境変化も大きな課題と認識している。</p> <p>海外移送の際の資料選定に関して、基準が明確ではない点で、難しさを感じた。</p>	
<p>②③京都精華大学/京都国際マンガミュージアム（以下京都 MM）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事業開始の根底は、各館が余剰としていた資料の保管庫を創造する=各館から集まった資料を重複分けし、「正本のサテライト倉庫」としての運用を模索することから始まったことである。初年度においては、人員(司書の知識/出納要員)の問題から、運営が難しいという課題が生じた。また、昨年のプロジェクトの過程で、各館が余剰としているものの多くが複本であることが分かり、今回明大が海外移送という点で行った通り、共同倉庫を「複本プール施設」として、複本を再活用するための中継基地として規定しなおすという最終議論に至った。 京都 MM は正本のサテライト倉庫という視点で事業を始めた経緯があるため、現在まだ正本をクママンに保管している状況。将来的にはその正本を京都 MM に戻すのか、正本登録をなくし、クママンに寄贈するのかを議論している過程にある。 ・マンガミュージアムのオープン(マンガを扱う施設の登場)が契機となって、寄贈が増えている。この寄贈資料を共同で保管・活用することで、今後同様の施設が増えた場合の一助となる。施設が先に出るのではなく、倉庫があることによって施設の構築ができる仕組みを作ることが、共同倉庫の大本の考えとなっている。今回明大が事業で実施している海外移送がその一例と位置づけられると考えている。 また、施設連携、つまり館と館を超えた活動を行った時に生じるのが、「人的コスト」の課題(人的コストが宙ぶらりんになる)。これが施設連携の最大の重要課題ととらえている。事業自体は単年度のケーススタディしかできない。連続性を持たせたときに、人材育成に関しては課題が生じるのではと考える。 今回は明大が連続性を持たせた事業にした手前、プールした資料を再活用したことに伴ってどういった問題が生じるのか、問題提起が必要と感じられる。 	<p>伊藤</p> <p>吉村</p>
<p>④北九州市漫画ミュージアム（以下北九州）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当初は 4,000 冊を「サテライト」での活用で移送した。必要があれば出納して戻すことを想定していたが、2017 年度は出納に至るニーズがなかったこともあり、今後どうするかが課題の一つとなっている一方、今後、北九州も、寄贈は増える見込みであり、複本プールとして熊本共同倉庫の役割を再認識している。 館としての課題は、収集の問題や、人員雇用に関して、「地方自治体による公共施設」であることによる制限に対するものが生じている点。他の自治体にある施設間連携を継続していくためにどのような課題があるのかを模索していく時期に入っている。 	<p>表</p>
<p>⑤ NPO 熊本マンガミュージアムプロジェクト/合志マンガミュージアム</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨年度まで京都 MM と事業を行っていた際は、正本数も少なく、「サテライト倉庫」としての機能が果たせていた部分があると認識している。一方、今回は物量が多く、倉庫を圧迫し 	<p>橋本</p>

付録

<p>ている状況が見られた。立地的な問題・マンパワーも鑑みた時に、今回の事業への対応には限界を感じており、今後の継続においては、「正本整理の中継所」としてではなく、昨年までの役割であった、「複本プール・複本バンク」として継続する方が現実的であると考えている。</p> <p>・合志マンガミュージアムの課題(橋本代表)</p> <p>合志マンガミュージアムの蔵書は、複本プールの活用によるものが多く、複本プール活用のプレイモデルとなっている。同時に、合志マンガミュージアムができたことで、京都 MM・北九州と同じく寄贈が増加している。</p> <p>今後は指定管理の下に入ることになり、「民」が参入してくる。「民」の参入が、施設間連携を促進すると考えている。</p> <p>→Q.複本を種にして施設をつくると、更に寄贈が増えるのは、汎用的な事例なのか？</p> <p>→A.京都 MM→北九州→クママンの流れを見ていると、そういった流れはあると考える。また、コレクターの年齢等を鑑みると、手放す時期に来ている人が多く、このタイミングを逃す手はないと考える。</p> <p>2. 保存拠点の拡充</p> <p>・各館の事例・課題共有に際して吉村先生から生じた質問を含め、質疑応答</p> <p>Q.今回の正本率の高さについて</p> <p>A.大口の寄贈者からの資料を中心に移送した。正数調査の時点からクママンにお願いしていた面もあり、正本率の高さも意識したものではない(実際に正数調査を行って発覚した点である)。</p> <p>目録登録に関しては、現在クママンスタッフが苦勞をしている点も理解している。過年度事業とデータの取り方が異なり、メディア芸術データベース(以下メ芸DB)に入力していた情報と、米沢嘉博記念図書館(以下米沢)独自の規則に従った情報の入力が発生する。この点については、今後、同一の事業を進め、館が増えるにしたがって、生じる事案であると認識している。ここから見える課題として、マンガの目録の取り方の難しさを感じた。クママンから提出されたデータをチェックし、修正が発生するという手間が何度も発生していることを鑑みると、今回の 20,000 という数に関しては、多かったと感じている。</p> <p>Q.雑誌を省いた理由について</p> <p>A.目録作成にあたって、雑誌と図書両方の対応は難しい可能性があったため、単行本のみとした経緯がある。</p> <p>→海外移送を念頭に置いた際に、雑誌よりは単行本のほうがニーズがあった側面もある。</p> <p>◆人材育成について</p> <p>・人材教育の観点で、図書館として考えた時に、目録規則の存在がネックになる。</p> <p>人材育成という観点では、標準化された規則があることが大切と考える。マンガに関しても、目録規則の標準化は重要であると考えている。</p> <p>→メ芸DBはそういった趣旨で創設されているが、現在本事業とは別のところで動いている面がある。だが、その考え方は重要であると考えている。</p> <p>※ここで時間が来たため、次年度に向けての課題創出までの議論には至らず、散会。 今後事業を継続する中で改めて議論をする必要があることを共有</p>	<p>森川 吉村</p> <p>吉村 斎藤</p> <p>吉村 斎藤</p> <p>森川</p> <p>菊池</p> <p>吉村</p> <p style="text-align: right;">以上</p>
--	---

付録

・2018年2月6日（火） 海外連携会議（南米）

実施日	2018年2月6日（火） 13:00 ～ 14:45	実施場所	合志マンガミュージアム 会議室
目的・議題	H29年度 文化庁連携共同事業 海外連携会議（熊本）		
出席者 (敬称略)	NPO 法人熊本マンガミュージアムプロジェクト：橋本博・鈴木寛之(熊本大学准教授) 学校法人明治大学：中林真理子 日本アスペクトコア株式会社：柳澤紳介・武中典子		

連絡・審議・決定事項	発言者(敬称略)
<p>◆テーマ：「国内外の機関連携によるマンガ雑誌・単行本等資料の連携型アーカイブの構築と人材育成環境の整備に向けた準備事業」に参画している海外連携先窓口との実務レベルの情報共有と海外でのマンガの管理方法</p> <p>・自己紹介</p> <p>1. 海外連携先現状報告</p> <p>海外連携先であるブラジル・コロンビアの実務担当窓口の明治大学教授である中林真理子先生より、海外連携先6施設のマンガ資料設置に関する現状をppt資料にて写真投影とともに説明報告があった。以下、各施設の現状とマンガ資料受入態勢説明。</p> <p>① ブラジル日本文化福祉協会 所蔵状況：付属図書館の蔵書約6万冊のうち、マンガ資料は1,000冊（雑誌含）。 受入態勢：図書館1階入口イベントスペースに配架（予定） 補 足：大学街の中心に位置していて、学生も多く、日本文化を広げるためにマンガを起爆剤として学生を呼び込む体制を企画。</p> <p>② 日伯文化連盟（アリアンサ） 日本語専門学校 所蔵状況：付属図書館（ジョアン・H・マツモト図書館）内のマンガスペース（ppt資料参考）にあり。冊数不明。 受入態勢：昨年7月完成の新校舎図書室にマンガスペースを新設し配架（予定）</p> <p>③ サンパウロ大学 日本文化研究所 所蔵状況：付属 Teiichi Suzuki 図書館に所蔵。冊数不明。 受入態勢：付属 Teiichi Suzuki 図書館内にマンガ資料用の書架を増設</p> <p>④ アルマンド・アルバレス・ベンチアード大学（FAAP） 所蔵状況：所蔵なし 受入態勢：図書館に配架。FAAP 大学博物館でも寄贈マンガの展示を企画（予定） 補 足：学生が寄贈マンガの到着を心待ちにしている。</p> <p>⑤ リオブランコ大学 所蔵状況：マンガ資料所蔵なし 受入態勢：図書室にスペースを新設し配架（予定）</p> <p>⑥ EAFIT 大学（コロンビア） 所蔵状況：マンガ資料所蔵なし 受入態勢：学内語学センターでマンガ資料を日本語の教材として活用（予定） 補 足：治安の状況確認をお願いした在京コロンビア大使館の文化担当から下</p>	<p>出席者全員</p> <p>中林</p>

付録

<p>記連絡が入っている。</p> <p>「EAFIT 大学には日本語センターもありますので大変喜ばれると思います。もしマンガの到着後、受取式等を行うようなことがありましたら、当館 HP のニュースに掲載できますので、その時は写真等を送っていただければ幸いです。」</p>	
<p>2.海外でのマンガの管理方法・人材育成について</p> <p>議題 2.に入るにあたり、合志マンガミュージアムの橋本代表より、海外連携先それぞれが受入態勢を確立されていることに感謝を述べるとともに、日本の文化に対する興味・要望が強いことを大変うれしく思う旨の言及があった。</p> <p>今回は、現地に寄贈マンガが到着していない中での議論だったため、到着後に出てくるであろう課題やその解決策についての議論となった。</p> <p>■人材育成についての課題</p> <p>◇連携先からマンガに対する質問がきたらどうするか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本で応答体制のシステムを確立することが重要。 ・質問に応答するだけでなく、移送マンガを管理・整理するための専門家の派遣も必要。 <p>◇そもそも海外連携先同志が友好関係にあるため、蔵書や人材が行き来し、情報共有ができるシステムを構築できればいいのではないか。</p> <p>■移送したマンガの管理活用方法の課題</p> <p>◇配架をどうするか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・すべて配架するのか、セクションするのかという問題がある。セクションする場合は移送する側で基準を用意したほうが良い。また、対象年齢層の確認も必要不可欠。重要なのは、選び方と並べ方である。 ・基準があつたうえで、現地での選び方や並べ方のレクチャーが必要ではないか ・到着後は、現地に行き、移送したマンガを確認したうえで上記課題の解決を図るほうが良い <p>■将来的なビジョン</p> <p>現在は、今回の海外連携のように日本のマンガが海外へ行っている。そして日本のマンガ文化が現地で定着する。さらに、そのマンガを読んで育った世代が現地でマンガを制作する。最終的には海外のマンガが日本にやってくる。というような、マンガの相互交流につながればいい。</p> <p>今回の議論では、結論を出すのではなく、今後に向けての課題解決方法を模索する形となった。現地にマンガが届いていない以上、結論には至らなかったが、到着後の課題について模索することで、今後の日本のマンガの管理方法や現地での人材育成に繋がられる有意義な会議となった。</p>	<p>橋本</p> <p>中林 橋本 橋本</p> <p>中林</p> <p>中林 橋本</p> <p>鈴木 橋本・鈴木</p> <p>橋本</p>

付録

<p>【謝辞】</p> <p>今回の海外連携会議では、当日の急なことではありましたが、鈴木寛之先生のご出席により、より有意義な会議となりました。</p> <p>ここで感謝をこめて謝辞を述べさせていただきます。</p>	以上
---	----

付録

・2018年2月7日（水） 事業省察会議

実施日	2018年2月7日（水） 13:00 ～ 14:40	実施場所	明治大学 駿河台キャンパス 大学会館 3F 第1会議室
目的・議題	H29年度 文化庁連携共同事業 省察会議		
出席者 (敬称略)	学校法人明治大学：森川嘉一郎・菊池亮一・伊能秀明・柴尾晋・齋藤宣彦 NPO 法人熊本マンガミュージアムプロジェクト：橋本博 文化庁：吉田敦則 大日本印刷株式会社：鈴木守・岩川浩之 日本アスペクトコア株式会社：柳澤紳介・藤本真之介・武中典子・小林真理		

連絡・審議・決定事項	発言者(敬称略)
<p>➤ 1/23の国内連携会議では、過年度から引き続きの課題等を掘り起こしたが、今回は、今年度の事業についての諸課題を洗い出す、これから残りの1か月間での課題の解消と、次年度に向けた見通しを目指したい。</p> <p>1. 今年度事業報告</p> <p>①雑誌単行本等の寄贈資料の整理作業報告</p> <ul style="list-style-type: none"> ・別紙資料を参照し、会議前日(2/6)の進捗状況の報告を行った。 ・正本登録に関しては、昨日の段階ですべて終了しており、来週中に移送も完了する予定。 熊本共同倉庫での作業は、今週を以て終了予定。 残りは、明治大学側のスタッフでの装備作業のみとなり、最終報告会までには完了する予定で進めている。 <p>②海外連携先への移送作業について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・北京への移送は完了。合計1,059冊となり、対目標値から106%となった。 初回発送分の132冊は既に到着済みとの連絡が入っている。1月以降の発送分はまだ先方には到着していない。 ・南米5カ所の移送についても、2/7時点で4機関への移送は完了予定。 残り1カ所は連絡先の確認中のため、確認でき次第発送。 ・コロンビア・エアフィット大学に発送するものも船便で送付する予定だったが、治安の問題上、日本から船便が出ていなかったため、SAL便にて発送した。当初船便を想定していたため、少し予算を超過した。 ・最終的には、エアフィット大学へ250冊・リオブランコ大学へ200冊・ブラジル文化福祉協会へ1,000冊、日伯文化連盟へ500冊、アルマンド・アルバレス・ベンチアード大学へ500冊の移送となる。 ・海外連携会議の報告 前日(2/6)に海外連携会議を熊本で開催した。当初はブラジルでの開催を想定していたが、移送資料が先方へ到達していないことと、より実務レベルのディスカッションができればという想定のもとで熊本での開催に変更した。 移送先6カ所についての紹介資料をブラジル移送の担当窓口である中林先生に作成依頼し、当日使用した。資料が提示されたことで、過去に寄贈された資料が利用されていることと、今回送付したのも同様に利用されるという期待が確認できた。それぞれの施設が受け入れ態勢を整え、どのように利用してもらうかを考えながら、今回の移送数を算出してもらっていること 	<p>森川</p> <p>武中</p> <p>柳澤</p> <p>武中</p> <p>武中</p>

付録

<p>が、実感できる会議であった。</p> <p>③シンポジウムの開催について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・詳細の報告は、1/23 会議でも報告したので詳細は割愛するが、一部補足がある。 ・今回は、明治大学で同日に開催されていた「アカデミックフェス」と日程を合わせて開催した。アカデミックフェスは、多様な分野、とりわけ、明大の研究とのマッチングを考えている企業担当者が話を聞きに来る機会でもあり、アーカイブ事業は色々な団体・企業が連携していかないと成立しないため、そういった方々にも参加していただくために日程を合わせての開催としていた。 ・アカデミックフェスというイベント自体も好評に終わり、今後も継続して開催する予定としている。 ・アンケート結果も好意的なものが多く、明治大学にはこの種の試みを継続してほしいというコメントも見られた。そういった意味においても、アカデミックフェスをまた開催する場合は、何らかの形でマンガ・アニメ・ゲームを扱ったメディア芸術絡みの催しを継続して開催する基盤が出来上がったと考える。この点は、次年度の事業をどうするかを考えるための要素にもつながると思われる。 ・別途補足することとしては、1/21 にグローバルホールでゲームに関するシンポジウムが開催された。明治大学の野生の科学研究所が主となり、東京工芸大学の先生を始めとした、学外の企業・教育機関の方々を招聘して学術的側面・アーカイブに関する議論を行った。こちらもち立ち見が出るほど盛況となり、継続していければいいという雰囲気が学内にも生じている。 ・次回のアカデミックフェスを開催する場合は、学内的にはこの二つを重合するような形式も検討される。昨年(11/23)のシンポジウムは、マンガ・アニメ・ゲームの連携を中心に据えて実施したが、ゲームに関しては手薄と感じられる部分もあったため、ゲームに重点を置いたシンポジウムの開催もありうると考える。 	<p>森川</p>
<p>◆その他、議題 1 に関する補足事項</p> <p>海外連携会議の開催日程について</p> <p>先程報告した海外連携先との会議は、ブラジルとの会議であったが、別途、北京との会議も実施を予定している。中国との会議に関しても、2/12 に中国窓口の古市先生と京都国際マンガミュージアムで実施する予定。実際に北京大で抱えている課題=配架方法・読ませる仕組み・整理の方法等について実務者レベルで話し合い、中国でその知見を活かしていただくための会議を予定している。</p>	<p>武中</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・当初は専門家を派遣しての研修を想定していたが、古市先生ご自身も京都マンガミュージアムへの視察のご希望があり、ミュージアムの視察を通じた研修が、今後の北京大学マンガ図書館閲覧室の運営に大きく寄与することが期待される。 	<p>森川</p>
<p>海外連携会議の報告・感想</p> <p>資料を確認した際、ジャパン・ハウスのセレクションが素晴らしくて感動した。</p> <p>通常、パッケージをつくとセットもので固めてしまう傾向があるが、タイトルの多様性を重視したセレクションに、セレクトの工夫の跡がみられ、いいモデルだと感じた。他のところにも活用できればと感じた。</p>	<p>橋本</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・セレクションに関しては、提供可能なリストを先方に提示して、その中で俎上に載せながらどういう本を送るかを議論したいという提案があった。「棚に並ぶ」「棚を作った状態」をシミュ 	<p>森川 斎藤</p>

付録

<p>レートして、それを写真に撮って送るなどの対応を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・よく知られているシリーズの切りのいいところまでに留めたり、単巻ものなどの対応を行った。性的な描写・暴力的な描写の者は内容を確認して避ける、見た目の数を増やす。背表紙を含めた見せ方を考え、大きさだったり背表紙だったり、バラエティに富んだラインナップにした。形態・形における多様性も考えた。 ・場所のレイアウトによってセクションは変わってくる。ただパッケージをを用意して並べてもらうのではなく、棚や場所の位置なども考慮している。 ・通い詰めて読む場所ではないので、そのことも想定して、作品数を増やす方を重視した。日本に関係のある人が手に取れる、職員が案内しやすいことを想定した。 ・今後移送する際には、「先方が何をしていて、誰が来場するのか」を確認しておくことは前提として必要である。見落としがちなのは、どういう空間のどういう高さの棚なのかなどによってセクションを変えることも大事だと考える。 <p>2. 今年度事業の課題と引継ぎについて</p> <p>＜明治大学として＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今回初めての取り組みだった。大学として感じた課題は、今回の計画については正直無理をして進めていたのではと感じた。 事業期間がタイトだったため、計画を実行に移していくことが大変だったように思う。そういう意味では、20,000冊という数値には無理があった。 ・想定より正本が多く、海外に移送するための複本が少なかったため、余分にそれらを用意・セレクトする場面が生じた。計画遂行も大切なことだが、変更も検討できたのではないかと感じる。 ・未整理資料という、複本・製本割合がわからないものを処理する、ということと、海外に移送する資料の数値があらかじめ決まっているという矛盾が計画に生じており、その矛盾が生じないような計画の制定や、現状に合わせた動きを取ることも想定が必要だった。 →計画段階でのなかで二通りの考え方を想定する必要があったということだと思われる(森川先生) ・計画を立てる段階で、「発生した複本」を送るという計画の立て方 ・複本の割合を予想だてる方法があるのであれば、見込みの中で動く ・今回は、見込みで進めた部分が多く、複本資料が足りない時にどうするかという策をあらかじめ講ずることや、米沢嘉博記念図書館から資料を送付する前に時間があれば、事前準備に時間をかけられ、正・複の割合も改善ができたのではないかと感じられる。 ・事業期間がタイトであったことから、海外発送が遅れた。故に、海外へのレクチャーができなかった部分があるので、目標から逆算をしたスケジュール立てが必要だったように思う。 ・人材育成に関してのレベル設定などが、精査できていなかった部分もある。 過年度はメディア芸術データベースへの登録が主体の業務であったが、今年度は米沢ルールで目録を作成する点で、過年度との業務の難度の差が生じていた。 ・現状、マンガの書誌登録に関しては、それぞれの館が持つローカルルールがあるため、今回のような事業で目録登録を行う場合は、予めルールについてそれぞれの館の専門家同士ですり合わせる必要があったと考えている。 	<p>柴尾</p> <p style="margin-top: 400px;">斎藤</p>
---	--

付録

<p>引き続き、共同倉庫での目録登録作業の対象が米沢嘉博記念図書館単館であるならば、今年の事業で蓄積したノウハウを継続していけばいいが、参加する館が増えた場合は、それぞれのルールで登録する必要があるため、そういったことがクママンで対応できるのかどうかという課題が生じる。</p> <p>規模が増えると、あらかじめの事前の準備が必要になる。ルールと人員体制を考え、認識を共有した上で計画を立てる必要がある。</p> <p>1/23の会議にて、菊池部長から、登録データの仕様をきっちり決めておけば問題は解消できるという提案があったがどうか。</p> <p>目録制定は長期的な目線で考えなければならないので、難しいのでは。</p> <p>規則策定は大変だが、それがないと結局そこを統一していかないと、いけないという部分を感じるし、そこを課題点として打ち出す必要性を感じる。</p> <p><熊本マンガミュージアムプロジェクト/熊本共同倉庫として></p> <p>今回の事業については、共同倉庫にもいろいろな問題があることが判明した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人の問題 <p>事業作業者は、昨年の経験者に引き継いでいたが、今年度の作業は過年度とはレベルが異なっていた。</p> <p>過年度の京都マンガミュージアムは移送時点で予め資料がセレクトされており、ほぼ複本だけの処理であった。正本登録作業は非常に限られていた。</p> <p>また、今回は、選別・登録作業だけではなく、移送作業(海外・正本返送)が発生し、現存のスタッフでは対応しきれない部分が生じていた。</p> <p>今回のように、作業が広範化した場合は、現場責任者を置かないと、回っていかない状況になる。今回はアスペクトコアからの派遣スタッフが随時現場作業を指揮していたが今後の方向性については、考える必要がある。</p> ・データの問題 <p>昨年度は文化庁のメディア芸術データベースを使用していた。メディア芸術データベースの書誌は、「どこになにがあるか」を把握する分には十分であるが、そのデータを実際に流用して図書館のローカル書誌を作成しているところはない。</p> <p>今後も連携事業としていろいろな施設に参加してもらいたいが、データベースを活用できる状態にしないと、今年度と同じように、メディア芸術データベースから流用してローカルの書誌を作ることの困難性を感じると感じる。</p> ・場所の問題 <p>熊本共同倉庫の収容量に限界が来ている。受け入れる資料は決まっているが、アウトプットがない状態。アウトプットしていく場所が必要になる。</p> <p>京都マンガミュージアム/北九州マンガミュージアムとの連携事業の際に、「コミックバンク」への検討があった。海外との連携や移送も大切だが、国内のアウトプット先の検討も必要と考えている。</p> <p>◆今回、目録作成という点で、メディア芸術データベースを活用する場面が多々生じた。</p> <p>今回の事業とは異なる分野ではあるが、兄弟事業ではあるので、この場を借りて課題の洗い出しを図りたい。</p>	<p>森川</p> <p>斎藤 菊池</p> <p>橋本</p> <p>森川</p>
--	--

付録

<ul style="list-style-type: none"> データの追加・書き換えのハードルが高い。1社で運営している関係上、アクセスできる館に限られており、間口が狭い。また、情報のアップデートまでに時間を要する。データベースを管理するところがスピーディーに対応してくれれば、解消されるのでは。 	橋本
<ul style="list-style-type: none"> 当初は新しい館ができたとき、メディアデータベースから書誌を流用すればいいようになるというのが想定だったが、現状そうっていない。 	
<ul style="list-style-type: none"> 大学図書館は国立情報学研究所(略称：NII)が共同目録を管理している。NIIは目録講習会で登録訓練を行い、一定の水準を担保できる環境を整えている。そういったことを組織的にやっていると、一つのデータベースを複数機関が共同で水準を保ち、アップデートしていくのは難しい。メディア芸術データベースには現状そういう仕組みがないので、1社でアップデートしていくしかない状況になっていると考えられる。 	菊池
<p>そういう仕組み・運営状況が確立できると目録規則の標準化のベースになるのでは。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> 文化庁はデータベースを活用してほしい意図がある。連携共同事業とデータベース活用・促進は運動してほしいという希望もあるが、予算的などで広がりが止まっている。 	藤本
<p>今回の明大事業でも文化庁からメディア芸術データベースのメタデータをいただき、それを活用して作業効率を上げた部分がある。そういう連携関係があることが、今後の継続を進めていく上で大切と考えられる。</p>	藤本
<p>→メディア芸術データベースの維持・存続については、文化庁の手を離れるということになるのか？</p>	森川
<p>データベースは終わってしまうと利用ができなくなってしまう。そこが見えていないと、どのくらいのエネルギーをかけて、直面している課題を解決すればいいのかが測れないため、その点も見通しを立てていかなければならないが、現状は不透明な状況。</p>	森川
<p>→国の出版物・文化の継承という面では、国レベルで維持・管理をしていくことは大切なものかもしれない。マンガ情報も学術情報とみなすのであれば、そこは文化庁とNIIを主管している文科省でも話をしてほしい。</p>	菊池
<p><連携事業参加時の費用面について></p>	
<p>大学が他所の機関に関わるお金を立て替えることについて</p>	森川
<ul style="list-style-type: none"> 連携先の大学が立て替えられるなら、その大学が担う分の事業を再委託という形にすれば、その大学での建て替えが可能になると考えるが、問題ないか？ 	森川
<p>→再委託は可能である。ただし、事業計画の予算書に「再委託」はないため、「業務委託」という形で依頼することになるだろう。最後の事業が終わったところで精算は可能。</p>	藤本
<p>→明治大学の今後に関しては、菊池部長側にて改めて検討課題となる</p>	藤本
<p><その他(感想・質疑応答など)></p>	
<ul style="list-style-type: none"> 今までの事業に参加し、「サテライト収蔵庫」というものの必要性は感じている。しかし、現状、熊本共同倉庫をサテライト収蔵庫として活用するのは難しいと感じている。熊本共同倉庫以外の場があるのであれば、今後はそれも検討課題としてほしい。 	橋本
<ul style="list-style-type: none"> 本事業に関しては、橋本先生がクママンの人員体制についてお話しされていたが、クママンだけの問題ではないところもあった。アスペクトコアも人材を想定以上に投入するなど、大変な側面もあったが、その分ノウハウも蓄積できたと考えているので、連携共同事業の中で、引き続きお手伝いできればと考えている。 	柳澤

付録

<p>今後の事業継続に関して、今回は数値目標に沿う形で動いていたが、事業の中で目標値等を変更することは可能だったのか？</p>	橋本
<p>→可能である。</p>	藤本
<p>可能なのであれば、今後の事業の中では状況に応じて、数値を下げるなどの対応も検討してほしい。</p>	橋本
<p>→今年は ISBN 番号のついている単行本に絞った整理を依頼しているが、今後は雑誌や ISBN のない古いマンガ単行本の整理も事業内容に入れ込むことを想定している。継続する中で、難易度が上がることは想定しておいてほしい。</p>	斎藤
<p>→雑誌もやりたいと思う。新しく来るものもこなしたいが、現在倉庫にあるものをどうするかという点も、連携事業の中で考えていきたい。</p>	橋本
<p>以上</p>	

付録

・2018年2月12日（月／祝） 海外連携会議（中国）

実施日	2018年2月12日（月／祝） 13:45 ～ 15:45	実施場所	京都国際マンガミュージアム 研究閲覧室
目的・議題	H29年 文化庁連携共同事業 海外連携会議（京都）		
出席者 （敬称略）	北京大学：古市雅子 京都国際マンガミュージアム：伊藤遊・渡邊朝子 日本アスペクトコア株式会社(明治大学)：柳澤紳介・藤本真之介・武中典子		

連絡・審議・決定事項	発言者(敬称略)
<p>テーマ：「国内外の機関連携によるマンガ雑誌・単行本等資料の連携型アーカイブの構築と人材育成環境の整備に向けた準備事業」に参画している海外連携先窓口との実務レベルの情報共有と海外でのマンガの管理・整理方法</p> <p>1. 海外連携先現状報告</p> <p>北京大学漫画資料室室長である北京大学副教授の古市先生より、北京大学漫画資料室のマンガ資料の保管及び整理の環境について写真資料をもとに以下の説明があった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・漫画資料室には、すでに明治大学から寄贈されている日本のマンガ文化及び歴史がわかるような20,000冊と、在中日本大使館より1年前から定期的に寄贈されているジャンプやマガジンのようなマンガ雑誌を所蔵している。また、マンガ資料以外のマンガ関連映像資料なども多数所蔵している。 ・整理状況としては、所蔵マンガ資料の大半が出版社、タイトル、作家ごとに配架されているだけのため、学生が目的の資料にたどり着けない状況や、日本語学科の授業利用の際には教員が読ませたいマンガにどう誘導すればよいのか悩ませている状況がある。 <p>2. 海外でのマンガの管理方法・人材育成について</p> <p>〈管理方法について〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・議題1でも説明したが整理方法のノウハウが不足しているため、大半が出版社、タイトル、作家ごとに配架されているだけであること、マンガ関連の映像資料なども多数所蔵していることから、マンガ資料と同様に整理方法のノウハウが不足している。これら雑多な資料の整理方法はあるのか。 ・図書館的な書誌ベースの登録・整理方法だけでなく、博物館的な登録・整理方法も視野にいれて模索する必要があるのではでないかとの提案があった。 ・実際には現地に専門家を派遣し、それぞれの資料に対しニーズにあった整理方法を考える必要がある。 <p>〈人材育成について〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料室の実質的な運営は、ボランティア学生によって支えられている。また、学生は卒業してしまうので、継続的に安定した運営方法はあるのか。 ・マンガ資料の運営については、スキルはあるがポストがないのが現状。ポストについては日本も同様である。 ・北京大学独自に、たとえばマンガ図書司書等のポストが作れば、継続的な運営の可能性もみえてくるのではないか。 	<p>古市</p> <p>古市</p> <p>伊藤</p> <p>伊藤</p> <p>古市</p> <p>伊藤</p> <p>伊藤</p>

付録

<p>・ポストを作るならばマンガ図書専門司書としての実績の蓄積が必要ではないか。そのためには、マンガだけではなく、研究に必要な参考書・研究書の所蔵も視野に入れたほうがいいのではないか。</p> <p>今回の会議では、マンガ資料の管理・整理方法について、古市副教授が京都国際マンガミュージアムを視察することで具体的な課題が見えてきた。これに対して、伊藤研究員と渡邊司書から管理・整理方法の提案が出された。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	渡邊
--	----

付録

目録整備仕様

米沢嘉博記念図書館データ登録仕様書

項目名	重要度	共通仕様	入力時の注意点
登録番号	(入力対象外)		
ISBN	(あれば入力)		書籍上の表記通りに記入する。 10ケタで記述されている場合は、10ケタで記入する。
箱番号	(入力対象外)	西暦-月日-はこの小口番号(作業日が2017年12月1日ならば、「2017-1201-001」。4ケタ-4ケタ-3ケタ)	
タイトル	(要入力)	<p>タイトル項目を入力する時は、標題紙、奥付、背、表紙の表記を確認し、奥付にある通りの入力を基本とする。</p> <p>タイトルにハートや記号が使用されている場合、〔ハート〕〔 〕はきっこうカッコを使用)のように記入する。白と黒の区別は不要。 ★☆はそのまま使用する。白と黒の区別についても表記どおりに記入する。</p> <p>タイトルの区切り記号は、「〇〇全角スペース/(全角スラッシュ)全角スペース△△」を使用する。</p>	<p>①奥付に「〇〇〇〇(△△)第〇巻 □□編」と記述されている場合 巻数の前の部分をタイトルに記入する。 (例、表紙の表記は「ドン[1□]鳴動編 極道水許伝」 奥付は「ドン(極道水許伝)[1□]~鳴動編~」 →タイトル「ドン 極道水許伝」、サブタイトル「鳴動編」)</p> <p>②奥付にローマ字でヨミがそのまま書かれていたり、英語でタイトルが併記されていた場合 ローマ字のヨミは入力不要(ヨミを補助する情報とみなす) 「〇〇〇〇(メインタイトル)▲ □□□(英語タイトル)」のように、タイトルに記入する。 ※スペース(=▲)は半角で入力。</p> <p>③「タイトル」がアルファベットで、カタカナ・ひらがなの表記がある場合 「ゆれ」ではなくヨミの情報とする。 (例、タイトル「GANTZ」、ヨミ「ガンツ」)</p>
タイトル(ゆれ)	(あれば入力)		<p>本タイトルのゆれのみ記入する。 巻数ものの中で一部だけタイトルが異なる書籍があったらゆれとする。 ※スペース(=▲)は半角で入力。</p>
タイトル(ヨミ)	(要入力)	<p>数字やアルファベットは読み方が不明ならば、そのまま数字やアルファベットで入力。 中黒(・)や記号(！、?)など読めないものは入力しない。 表音文字で入力。 (水を→ミスオ、今日は→キョウワ、北へ→キタエなど)</p>	<p>カタカナで入力する。スペースは入れない。 ヨミが2通りある場合、優勢なものから順に記述することができる。 区切り記号は、「〇〇全角スペース/(全角スラッシュ)全角スペース△△」を使用する。 (例、「マジン▲/▲デビル」)</p>
サブタイトル	(あれば入力)		<p>タイトルに関連するタイトルを入力する。 奥付を見て「〇〇〇〇(△△)第〇巻 □□編」とある場合、巻数の後ろにある記述をサブタイトルに記入する。 レーベルタイトル以外のシリーズタイトルもここに記入する。 シリーズタイトルの番号の記述は不要。どこにも入力しなくてよい。 (例、「兄崎ゆな傑作集 1」などのタイトルは、サブタイトルに記入する。「兄崎ゆな傑作集」→「1」の記入は不要。)</p>
作者	(要入力)		<p>絵を描いている人を主体とし、作者とする。</p>
原作	(あれば入力)	<p>作者が複数いる場合は3人まで入力。 (〇〇全角スペース/(全角スラッシュ)全角スペース△△) 備考に「ほか作者～」と入力してもよい。 絵本のように文と絵を描いている人が異なる場合は、</p>	<p>原作、原案、作者、脚本はここに入力。 書籍に表記があれば、名前の前に役割を記入する。 (例、[原作]垂樹直)</p>
作者(ヨミ)	(要入力)	<p>「絵」を描いている人が「作者」、 「文」を書いている人が「原作」</p>	<p>・カタカナで入力する。スペースは入れない。 ※作者を記入したら忘れずに入力のこと。</p>
その他	(あれば入力(翻訳者など))	<p>作者がいない(編著者のみ)本の場合は入力不要 (例、[原案]山本周五郎 / [脚本]二橋進吾)</p>	<p>編集、翻訳、監修、協力などはここに入力。 書籍に表記があれば、名前の前に役割を記入する。 (例、[編]小学館ドラえもんルーム / [監修]藤子プロ)</p>
原作(ヨミ)	(あれば入力)	<p>複数いる場合は3人まで入力。 (〇〇全角スペース/(全角スラッシュ)全角スペース△△)</p>	<p>・カタカナで入力する。スペースは入れない。 ※原作を記入したら忘れずに入力のこと。</p>
その他(ヨミ)	(あれば入力)	<p>ほかと記入されている場合は、ほかもスペースで区切る。</p>	<p>・カタカナで入力する。スペースは入れない。 ※その他を記入したら忘れずに入力のこと。</p>
巻	(あれば入力)		<p>※巻数を間違えないように！ 特に欠番の巻がある場合は気を付ける。 Excelのオートフィル(連続コピー機能)を使用する際は、数字が変わっていないか必ず確認のこと。</p>

付録

米沢嘉博記念図書館データ登録仕様書

項目名	重要度	共通仕様	入力時の注意点
巻ゾート	(要入力)	巻数表示がないものでも「1」と入力する	巻ゾートに「0」は使用しない。必要がある場合は「1」と入力する。 小数点の使用は不可。
シリーズレベル	(あれば入力)		「少年ジャンプコミックス」「フラワーコミックス」など、レベル名を記入する。 奥付の表記を優先する。 ※作品のシリーズ名はサブタイトルに入力のこと。作品番号は記入不要。 (例、「兄崎ゆな優作集1」等のタイトルはシリーズレベルに入れない、サブタイトルに「兄崎ゆな優作集」と記入する。)
シリーズ番号	(あれば入力)		シリーズレベルの略語に該当するアルファベットは省いて入力する。 新書や文庫の番号に含まれるアルファベットは略語でないケースが多いので注意のこと。 (例、「FC-441」の場合 フラワーコミックス441の意味なので「441」のみ記入。)
異版名	(あれば入力)		改訂版、増補版、完全版、新装版など版表示を入力する。
刷数	(要入力)		入力対象資料が第何刷かを記録する。数字のみ入力する。
版数	(あれば入力)		入力対象資料が第何版かを記録する。 数字のみ入力する。 改訂版、増補版、完全版などは異版名に記入する。
初版発行日	(要入力)	4ケタ-2ケタ-2ケタ 日付不明、判読できないなどの場合は空欄にし、備考に 「発行年月日表記なし」 「発行年月日表記あり、目視不可」 などの記述を行う。	単行書が一番最初に発行された日付を入力する。 月日が1ケタの場合は、「0」を入れて入力する。 (例、「2006/01/05」)
発行日	(要入力)		入力対象資料の発行日を入力する。 (例、1994年6月20日 第1刷発行 1995年6月15日 第9刷発行 であれば、「1995/06/15」と入力。)
発行元	(要入力、出版社)		出版社名を記入する。
発行元(ヨミ)	(要入力)		・カタカナで入力する。スペースは入れない。 ※発行元を記入したら忘れずに入力のこと。
発売元	(あれば入力)		発売社名を記入する。
発行地	(あれば入力)		発行元の所在地を記入する。 東京23区内は「東京」、東京23区以外と他府県の場合は、市町村名を記入する。 (例、東京都千代田区→「東京」、東京都青梅市→「青梅」)
発売元(ヨミ)	(あれば入力)		・カタカナで入力する。スペースは入れない。 ※発売元を記入したら忘れずに入力のこと。
形態	(入力対象外)		
判型	(要入力)		・A5判、B6判は「A5」「B6」で統一する。 入力の際は半角英数字を使用。 該当する判型がない時は「〇x〇cm」と記入する。 ※判型の入力ミスに注意。 特に同じ型本の登録が続いた場合は十分に気を付けること。
雑誌コード	(あれば入力)		コミック本の裏表紙に表記されていることが多い。 ※入力もれに注意。
成年マーク	(あれば入力)		表記があれば「有」と入力する。→成年マークは登録対象外

付録

米沢嘉博記念図書館データ登録仕様書

項目名	重要度	共通仕様	入力時の注意点
備考	(帯や付属品などがあれば記載)	この項目はOPACで外部向けに表示されるので、外に出ていいデータで必要があれば入力する。	<p>入力対象</p> <p>①書籍に付属しているもの 帯、書籍からとり外れる付録、作者のサインなどが特別にある場合 (例、「帯あり」 「付録として○○あり」 数が複数ある場合は「○○が*枚あり」と数量も入力。) ②本来ついてははずのカバーがなくなっている場合 「カバーなし」「カバー欠け」等と入力。 ③タイトルや著者名の漢字や文字がPC上で表示できない場合、 備考に「○○の××は△△」と入力する。 (例、渡邊の「遼」のしんによつての点が1つの場合 「作者「渡邊○○」の遼はしんによつての点が1つ」など ④ISBNや初版発行年、発行年の表記がない場合 「ISBNの表記なし」、「発行年月日表記なし」 ⑤発行年月日の表記はあるが、破損や汚れで読めない場合 「発行年月日表記あり、目視不可」 ⑥展示会カタログなど 「備考」に会場や会期を入力 → 米沢図書館伊藤様に連絡し、確認すること。</p> <p>入力対象外</p> <p>①とじこみ付録(書籍と分離しないもの) ②読者カードや新刊案内、スリップ →書籍と一緒に保存するため、書籍にそのまま挟んでおく。 ※備考欄に記入の際は、利用者にとってわかりやすいよう、 あまり言葉を省略せずに入力すること。</p>
資料状態	(要入力)	米沢館内にはないものは「利用不可」	※一括入力するため、作業時の入力は不要。
シール	(入力対象外)		
資料状態備考	(必要に応じて入力)		(例、「汚れあり」「虫損あり」「シミあり」など)
言語区分	(要入力)		本文が日本語であれば「日本語」
寄贈者名	(要入力)	寄贈の場合は寄贈者名 購入した場合は「米沢嘉博記念図書館(図)」	挟み込みスリップに記載された寄贈者名を入力する。
資料種別	(要入力)	マンガなど「絵」がメインのものは単行本、 文が中心(カタログや解説書)は参考図書	解説本、読本、ファンブックはできるだけ参考図書にする。
ステータス	(要入力)	館内にはないものは「作業中」	※一括入力するため、作業時の入力は不要。
資料建級区分	(要入力)	一律「一般」	※一括入力するため、作業時の入力は不要。
所蔵場所	(入力対象外)		※一括入力するため、作業時の入力は不要。
単行区分	(要入力)	単行本・雑誌・同人誌のうちのどれか ここでは「単行本」	※一括入力するため、作業時の入力は不要。

本報告書は、文化庁の委託業務として、大日本印刷株式会社が実施した平成 29 年度「メディア芸術連携促進事業 連携共同事業」の成果をとりまとめたものであり、第三者による著作物が含まれています。転載複製等に関する問い合わせは、文化庁にご連絡ください。